

第26回
デトロイト市派遣学生
帰国報告書

2023



Golden Days Abroad in Detroit

～ 姉妹都市デトロイトを訪ねて ～



目次

	page
■ はしがき	2
■ デトロイト市派遣学生・受入家庭名簿	3
■ 派遣日程・研修日程	4
■ ホストファミリー紹介	6
■ 滞在中の当番日記	15
■ レポート	26
■ 派遣を終えて	35
■ 英語での感想文 (Reflections written by each student in English)	55
■ 豊田市・デトロイト市姉妹都市交流資料	59

は し が き

豊田市長 太田 稔彦

1960年に豊田市とアメリカ合衆国ミシガン州デトロイト市との間に姉妹都市提携が結ばれてから、63年を数えます。当市は「クルマのまち」として世界にその名を知られ、日本の製造業の中心地としての役割を果たしてまいりました。同じく「モーター・シティ」として知られるデトロイト市との長い歴史の中で、市民同士の友情を育んでまいりました。

デトロイト市との交換学生事業は1965年に始まり、これまでに400名以上の学生が交流し、両市の親善に貢献しております。第26回の交換学生派遣団10名も、約2週間に及ぶ友好親善の務めを果たし、無事帰国いたしました。派遣団の帰国あいさつでは、デトロイト市民との交流を通して感じた文化の違いなどについて報告を受けるとともに、今回の経験をこれからの人生に生かし、今後も、積極的に姉妹都市交流に関わっていきたいという学生たちの強い決意も聞くことができました。

豊田市からの派遣団が初めてデトロイトの地を踏んだ1966年から50年以上の年月を経た今日、国際化の流れは更に加速しております。当市には、海外生活で得た経験を、ビジネスや学業等に発揮している市民が多く居住しており、また、就労を目的として来日し、その後、日本で暮らすことを選択した外国人や、日本人と結婚し、日本で暮らすことを決意した外国人も多く居住しています。新型コロナウイルスの影響で2020年度以降減少した外国人人口も現在は再び増加傾向となり、今後も国際化の傾向は強まると予想されます。あらゆる情報が容易に手に入る今日、わざわざ海外へ出かけなくても、知識は得られるかも知れません。しかし、「百聞は一見に如かず」とのことわざにもあるとおり、自ら進んで得た経験こそが、自身をより成長させるのだと信じております。今後もこの事業に対し、高校生の皆様が積極的に参加されることを期待しております。

おわりに、今回の交換学生派遣事業にご理解とご協力をいただいたご家族、学校関係者の方々をはじめ、交換学生派遣団に貴重な機会と経験を与えてくださったデトロイト市の事務局、ホストファミリー、デトロイト市民の皆様にご心からお礼を申し上げます。

派遣学生・受入家庭名簿

氏名	勤務先・学校(学年)	受入家庭
リーダー 三宅 君代 Kimiyo Miyake 	豊田市国際交流協会 ボランティアグループ 所属	The Frazer-Wilson Family
サブリーダー タフ カール Carl Taff 	豊田市国際交流協会 主査	The Krassenstein Family
派遣学生 太田 鈴桜 Rio Ota 	椋山女学園高等学校 1年	The Williams Family
派遣学生 佐野 翔太 Shota Sano 	豊田西高等学校 2年	The Trent-Coleman Family
派遣学生 高木 花音 Kanon Takaki 	豊田南高等学校 1年	The Glore Family
派遣学生 高村 和歩 Kazuho Takamura 	豊田西高等学校 1年	The Cato Family
派遣学生 成田 一葉 Ichiha Narita 	豊田西高等学校 1年	The Elyse-Kudowor Family
派遣学生 日置 千咲乃 Chisano Hioki 	豊田北高等学校 2年	The Daniel Family
派遣学生 藤田 結 Yui Fujita 	名古屋大学教育学部 附属高等学校 2年	The Tandy Family
派遣学生 山本 悠斗 Yuto Yamamoto 	豊田北高等学校 2年	The Smith Family

派遣日程

日 時		予 定
8月7日(月)	0:30 1:30	デトロイト・メトロポリタン・ウェイン国際空港 着 マリオット・ホテル・ルネサンス・センター 宿泊
8月8日(火)	13:00 18:00	オリエンテーション、デトロイト市内ツアー ホストファミリーと対面・夕食 ホームステイ開始
8月9日(水)	8:30 9:30 14:45	集合 在デトロイト日本国総領事館訪問 デトロイト市長表敬訪問 デトロイト市内ツアー(モノレール)
8月10日(木)	8:30 9:30 13:00 18:00	集合 ウェイン州立大学訪問 デトロイト・タイガーズ試合観戦 フレンズ・オブ・トヨタによるウェルカムパーティー
8月11日(金)	終日	ナイアガラの滝見学(日帰り)
8月12日(土)	終日	ホストファミリーと共に過ごす
8月13日(日)	終日	ホストファミリーと共に過ごす
8月14日(月)	8:30 9:30 13:30	集合 デンソー訪問 体験型ワークショップ(彫刻家サフェル・ガードナー氏)
8月15日(火)	14:00	チャールズライト・アフリカ系アメリカ人歴史博物館訪問
8月16日(水)	8:30 9:30 14:30	集合 デトロイト歴史博物館訪問 Renaissance High Schoolの高校生と交流
8月17日(木)	8:30 17:30	集合 さよならパーティ準備 さよならパーティ開催
8月18日(金)	8:30 9:30 16:00	集合 フォード ルージュ工場見学 ダイヤモンド・ジャック・リバーボートツアー
8月19日(月)	6:30 9:29	デトロイト・メトロポリタン・ウェイン国際空港 集合 デトロイト・メトロポリタン・ウェイン国際空港 発
8月20日(火)	19:20 20:00	中部国際空港 着 中部国際空港 発(市バス)

研修等の日程

令和5年

- | | |
|-----------|----------------------------------------------------------|
| 5月 1日 (月) | 「広報とよた」、市ホームページに派遣学生の募集掲載 |
| 6月10日 (土) | 派遣学生 選考試験 |
| 6月15日 (木) | 派遣学生 決定 |
| 7月 1日 (土) | 第1回事前研修会
(派遣日程・参加負担金・渡航説明等) |
| 7月15日 (土) | 第2回事前研修会
(デトロイト市の概要と英会話研修、前回派遣者によるアドバイス、さよならパーティの打合せ) |
| 7月23日 (日) | 第3回事前研修会
(さよならパーティの打合せと調理実習) |
| 7月24日 (月) | 市長・市議会議長への出発挨拶及び旅行社からの最終説明 |
| 8月 2日 (水) | さよならパーティ出し物練習 (ダンス、バンド演奏) |
| 8月 7日 (月) | デトロイト市へ派遣 |
| ~20日 (日) | |
| 8月23日 (水) | 市長・市議会議長への帰国挨拶 |
| 10月1日 (日) | 「国際の日 ワールドツアー in TIA」にて派遣報告 |

ホストファミリー紹介

The Frazier-Wilson Family

リーダー 三宅 君代

私は今回、Frazier-Wilson Family にお世話になりました。エレインとテリー夫婦が初めて会った私に「日の丸」と「ラジオ体操」のサプライズで大歓迎してくれたおかげで、私のデトロイト滞在は一生忘れられない思い出となりました。



ホストマザーのエレインはとにかく聡明でお洒落でかっこいい人で、デトロイト市役所と親族の建設会社で会計士として勤務しています。1987年製の赤のコルベットを颯爽と運転し、私を教会とクラシック

カーの祭典「ドリームクルーズ」の前夜祭に連れて行ってくれました。また、彼女はとても心優しい人で、コーディネーターのローズさんからの連絡も快く受けてくださり、派遣団の体調不良についても私と一緒に心配していただきました。

ホストファザーのテリーはデトロイト市の対岸に位置するカナダのウィンザー市の出身で、自動車販売店に勤務しています。彼は人と話すのが大好きで、冗談を言ってたくさん笑わせてくれました。週末には、彼の親族が数十年ぶりに一堂に会するファミリーリユニオンに連れて行ってくれました。自分の親族と楽しそうに話す様子を見て、どこの国でも家族の絆を大切にする気持ちは同じだと思いました。

滞在中、特に思い出深いのが、新たに教わった「フェーズ10」というカードゲームです。UNO よりも少し難しいそのゲームをしながらテリーが冗談を言ってエレインと私を笑わせて、でも結局最後はエレインが勝つという最高に楽しい時間を過ごしました。ぜひ彼らが日本を訪れた際は私もサプライズを用意しておもてなしをしたいと思います。

The Krassenstein Family

サブリーダー タフ カール

クラッセンシュタイン家は、父親のサミュエル、母親のアシュリー、そして1歳になる息子のエズラの3人で、30代半ばの比較的若いご夫婦でした。サミュエルはデトロイト市の職員で、インフラストラクチャーのチーフとして働いており、アシュリーはニューヨーク州ロードアイランドにあるアイビーリーグのブラウン大学でアシスタント・ディレクターをしています。彼らはユダヤ教徒とキリスト教徒の家族で、家族を非常に大切にしており、定期的に他の親戚の方々も参加する活動を行っています。私はそのうちの何人かに会うことができ、参加したイベントで素晴らしい時間を過ごすことができました。その結果、彼らとの11日間はあっという間に過ぎ去り、幼いエズラとの思い出も含めて、楽しい思い出となりました。

サミュエルとアシュリーは二人とも自分の仕事に専念していましたが、私が快適に過ごせるようにあらゆる配慮をしてくれました。日本にいる私の家族ともビデオ

通話をしてお互いの家を見学したりもしました。広々とした庭のある素敵な家で、裏庭のバーベキューグリルは、グリルやバーベキューが好きな私の目をすぐに釘付けにしました。彼らの温かくフレンドリーなおもてなしに感謝の気持ちを表すため、私はジャマイカ料理をいくつか作りました。グリルから漂う香りは、私のルーツであるジャマイカを思い出させてくれました。私たちは連絡先を交換し、彼らは将来日本を訪れることを約束してくれました。



The Williams Family

太田 鈴桜

私がお世話になったホストファミリーはカッコいいお父さんとしっかりしたお母さん、それぞれ個性が強い4人姉妹、好奇心旺盛の犬1匹の家族です。

○Rachelle(ホストマザー)

ホストマザーは看護師さんで家族思いの優しいマザーです。朝が早く会えない時もありましたが、いつもみんなをまとめてくれて引っ張ってくれました。体調をもものすごく心配してくれて、帰る時のパッキングも手伝ってくれました。

○Dante(ホストファザー)

ホストファザーは美容師さんで料理がシェフ並に上手なファザーです。ホームステイ2日目の夜ご飯にピザを作ってくれました。生地から作る本格的なピザだったのでものすごく驚きました。

○Emani(ホストシスター)

彼女は高校生で家族の中で1番日本語が話せます。いつも送迎してくれてよく日本語で話しかけてくれました。4姉妹のリーダー的な存在です。

○Ilama(ホストシスター)

彼女はk-popが大好きで1番話しかけてくれました。美容に詳しくておすすめのコスメを教えてくださいました。

○Omaria(ホストシスター)

他の場所にいたため途中合流となった子で、私が風呂場でドアが開かなかった際に良く開けてくれました。

○Uriah(ホストシスター)

1番控えめな子でサッカーを習っています。恥ずかしがり屋でしたが、話しかけると答えてくれて優しかったです。

右の写真には家族以外に友達のケンジくんが写ってます。彼はとても元気な子



です。

I love Williams Family.

The Trent-Coleman Family

佐野 翔太

僕がお世話になったのは、Trent-Coleman Family です。父の Kenneth と母の Kim、そして 15 歳の Jackson の三人家族です。初めて会う時、僕は人生の中で一番緊張していましたが、そんな僕に「緊張しなくていいよ！」と声をかけてくれたり、いろんなことを話してくれたり心優しい家族でした。



父のケンはお朝飯を作ってくれて、いつも僕を送り届けてくれました。ホームステイ中、ちょうど女子サッカーワールドカップが開催されていたため、夜遅くまで一緒に観てくれました。Oh! とか Ahh! とか試合を見ていた間はずっとそんなことを言っていたような気がします。

母のキムは、音楽と美術が好きな、芸術系のお母さんでした。車を運転している時は、いつもイカした音楽をかけながら、ノリノリで歌っていました。そして何より歌が上手です。助手席に座っていましたが、まるでコンサート会場にいるかのようでした。家には沢山の美術の作品が飾ってあり、とても魅力的でした。いつも忙しくて夜遅く帰ってくるにも関わらず、ジェンガと一緒に遊んでくれた時もありました。

そして最後に、ジャクソンです。父にはジャックスと呼ばれています。多分シャイだと思います。でもとても優しい人です。一緒に買い物に付いて来てくれるし、僕が困っていたら助けてくれました。或る日は夜ご飯を作ってくれました。それはチキンで、アメリカの生活の中で一番美味しかったと言っても過言ではありません。とってもシャイだった僕をちょっとシャイな僕に変えてくれた、とってもいい家族です。

The Glore Family

高木 花音

私の素晴らしいホストファミリーは、お父さん、お母さん、長女、そして双子の 5 人家族です。この家族との日々は、私の留学生生活を特別なものにしてくれました。

ホストファザーのグレッグさんは真のスポーツマンで、私と一緒にバレーをしたり、沢山スポーツの話をしたりしました。彼のスポーツへの情熱には伝染力があり、私は彼からスポーツの楽しさを改めて学びました。

ホストマザーのロリさんはとても明るくて元気な方です。その明るさと温かさで私のホームステイ生活を明るくしてくれ、彼女の笑顔が私の心をいつも温かく包んでくれました。彼女は家族全体に幸せをもたらし、私もその家族の一部として迎え

入れてくれました。

双子のドリームとジャーニーは、私との時間を大切に、一緒に遊び、笑ってくれました。彼女たちは私にとって新しい友達であり、彼女たちとの冒険は私のホームステイ生活を豊かにしてくれました。一緒に過ごす楽しい瞬間がたくさんありました。

そして長女ゼンは私が最初に到着した日から、いつも私の傍にいてくれました。彼女の優しさや理解力は、私の不安を取り除いてくれました。彼女との友情は今回の経験において特別なものとなりました。

私は、最初は不安ばかりでしたが、この素晴らしいホストファミリーが私を受け入れ、家族の一員として迎え入れてくれたことに感謝しています。彼らとの思い出は一生の宝物であり、彼らの温かさや愛情に感謝しています。この家族との経験は、私のホームステイを素晴らしいものに、私の人生に深い影響を与えてくれました。



The Cato Family

高村 和歩

僕は、Cato Family にお世話になりました。Cato Family は、お父さんの Steven とお母さんの Simone、三兄弟の Makaio (15)、Josiah (13)、Emmanuel (10)、そして、女の子の Nadia (7) の 6 人家族でした。

○Steve(ホストファザー)

毎日、集合場所までの送り迎えをしてくださいました。事あるごとに、僕の心配をして、手伝おうとしてくれるとても良いお父さんです。アメリカを旅立つ前日には、クラシックカーが集まる公園の周りまで、ドライブに連れて行ってくださりました。

○Simone(ホストマザー)

毎朝、起きると「Good morning. How are you?」と声をかけてくれました。いつも、健康な生活ができるように、食事や生活リズムを大切にしよう、よく声をかけてくれました。また、朝ご飯を作りながら歌う声がとてもきれいでした。常に気を配る良いお母さんでした。

○Makaio(15)

毎日、サッカーの練習に真面目に取り組むサッカープレイヤーでした。一度、サッカーの練習を見に行きました。その時、素人の僕でも分かるくらい、上手でした。

○Josiah(13)

初めて会ったときから、既に友達かのようにどンドンと話しかけてくれました。一緒にトランポリンをしたり、ゲームをしたりとなんだか友達のような雰囲気でした。

○Emmanuel(10)

Josiah とタイプがとても似ていて、友達のように接してくれました。庭で驚かそうと隠れていたりといった少年といった感じでした。

○Nadia(8)

人見知りなタイプでなかなか話しかけても聞いてもらえませんでした。しかし、将棋やチェス、ゲームなど面白いものは見逃さずに参加していました。



The Elyse-Kudowor Family

成田 一葉

私がお世話になったホストファミリーを紹介します。

○Kimberly(ホストマザー)

Kimberly は日本で言う市役所の環境課のような所で働いています。また教会のシスターでもあります。とてもフレンドリーでパワフルな人で、自ら「ママベア」と名乗りみんなを守っているお母さんです。「ママキー」と呼んでと言ってくれ、職場が私の毎日の集合場所と同じ建物であった事も、毎日送り迎えをしてくれました。今日あったことをその日の帰りの車の中で話してとても楽しかったです。



○Keziah(ホストシスター)

Keziah は高校 3 年生で歌とダンスが好きで、友達からとても好かれている女子高校生です。カタカナ読みをするとケエイズィヤと読み、サロンでバイトをしています。ステイ先の寝る部屋が同じで毎日「おはよう」と言い合い、良い一日をスタートさせることが出来ました。「ズィーヤ」と友達から呼ばれているらしく私もそう呼んでいました。

○Hope(猫)

黒い猫です。4 歳ぐらいで保護センターから引きとったメスの猫で、これまで私

は猫とあまり関わった事がなくこの経験により、私は少し猫アレルギーだとわかりました。

ホストマザーとホストシスターは 2 人とも親切で初めて会った時にハグをして迎え入れてくれました。2 人は家で映画を見ることが好きで、夜はほぼ毎日、私がお風呂に入っている時やご飯を食べている時に Netflix で映画を見ていました。また K ドラマが好きと言っていたので私の知っている K ドラマを紹介したら楽しく観てくれました。また Keziah はミュージカル映画が好きらしく初めて一緒に観た映画はオズの魔法使いでした。

The Daniel Family

日置 千咲乃

私がお世話になったホストファミリーは、Daniel 一家です。2018 年にもデトロイト派遣学生のホストになっていらっしゃる、日本人にとっても友好的な家族です。

お父さんの Mr.Daniel。彼はとても紳士です。私の拙い英語を頑張って理解しようとしてくれます。アイスクリーム屋さんやジャズコンサートに連れて行ってくれました。本当に楽しかったです。彼と一緒にいると様々な初めてが経験できました。

次に、お母さんの Mrs.Daniel。本当のお母さんのように私のことを気にかけてくれました。ナイアガラの滝の帰り、手を繋いでくれたこと、今でも忘れません。彼女は私に笑顔が似合うよと言ってくれました。

長女の Olivia。韓国留学に行ったばかりだったので、韓国のことも教えてくれました。ショッピングモールにも連れていってくれてとても嬉しかったです。鬼滅の煉獄さんが推しで、私が絵を描いたら喜んでくれました。

次女の Elissa。彼女は私と一番一緒にいました。Elissa のおすすめの映画はいつも最高でした。ショッピングでは私に帽子を選んでくれました。一番楽しかったのは帰国前日に外出したことです。一緒にゲームセンターでゲームをしました。最高に exciting でした！

三女の Alana。彼女はホームステイ途中でサマーキャンプに行ってしまう、最後は会えませんでした。とてもお世話になりました。彼女とやったホラーゲームは最高に怖くて二人で叫びました。彼女が勧めてくれた「Cat & Soup」というスマホゲームは今でも毎日やっているぐらいに好きです。

猫の Alice。映画を見ているときに膝に乗ってきてくれました。大きくてとても可愛い猫。撫でたら気持ちよさげに目を細めていました。

Daniel Family は私のアメリカでの家族です。本当に感謝しかない！！ Thank you！！



The Tandy Family

藤田 結

私のホストファミリーは、Tandy family！デトロイトをこよなく愛する、あったかい家族です。

お父さんは、おふざけ大好き、笑顔の絶えない Mr.Tandy！私が持参したフリーズドライの味噌汁を、「おいしいクッキーだ！」と言ってお湯をかけずに食べてしまったり、写真撮影の時に周りが cheese!という中、ひとり、Cabbage!! と叫んでみたり、いつでもどこでも、まわりを笑わせてくれる愉快的な人です。

そして、とっても愛情深いお母さん Ms.Tandy！彼女は常に私のことを気にかけてくれて、今日はどうだった？夜は何が食べたい？あなたの日本の家族は元気？と、毎日毎晩、私にとっては嬉しい質問攻め！私が話す時には耳を傾け、目を見ながら笑顔で話を聞いてくれました。顔を合わせる度にあったかいハグをしてくれた mom！大好きです！

最後に Lauren！！最終日に、私達は本当の姉妹だよね、と言ってくれた、愛すべき妹です。Dad と mom が寝てしまったあと、2人でこっそり恋愛映画を観たのは良い思い出！家族がいると気まずいよね、なんて言いながら、キスシーンの度に2人でキャーキャー騒ぎ、結局 mom を起こしてしまいました。ちょっと気まずくて、とても楽しくて、笑ってばかりの夜でした。夜遅くまでたくさん話したこと、毎晩一緒に踊ったこと...全部が素敵な思い出です。

絶対にまた帰って来なさい！！と、何度も言ってくれた私のファミリー！今度は英語をもっと上達させて、会いに行きます！



The Smith Family

山本 悠斗

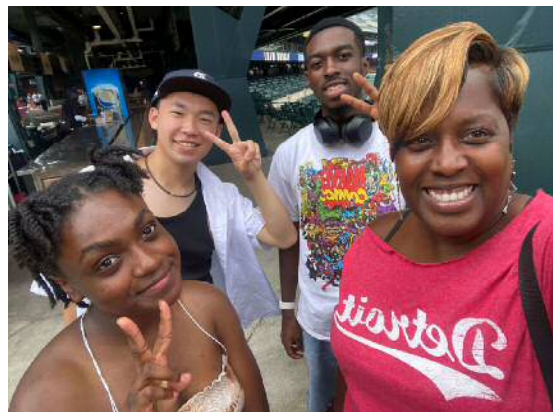
僕が大好きなホストファミリー“Smith family”を紹介します！！

○Sherri(ホストマザー)

毎日テンションが高く、常に笑顔で話しかけてくれた最高のお母さんです！車で集合場所まで送迎してくれている時に、大音量で音楽を流してノリノリで歌っている姿を見て元気をもらっていました！

○Isaiah(ホストブラザー)

9月から大学生のお兄ちゃんです！ポケモンの話など沢山話しかけてくれました！一緒にマリオカートをやった時、負けて叫



んでいるお兄ちゃんの姿は今でも思い出すと笑ってしまいます。

○Niomi(ホストシスター)

高校で日本語を学んでおり、家族一日本語が話せる妹です！一緒にディズニーの映画をみたり、パーティーに行ったり色んなところと一緒に去了。1試合40分のジェンガバトルはものすごく面白かったです！

○バンビ&アッシュ(愛犬)

帰国する日までずっと吠えてきた犬達です。特にバンビは小さくて可愛いのにずっと吠えてきて、毎朝追い駆けっこしてました。アッシュは、ザ・番犬な見た目で大きく、庭を爽快に走り回っていてとても元気でした。

こんな最高の家族に出会えたことをとても嬉しく思います！お世話になった家族への感謝を、来年豊田市に来る Niomi に伝えたいです！！

当番日記

1日目：8月7日（月）

待ちわびていた日がついにやってきました。いつもより体が軽く、なんでも出来そうな日でした。昼にみんなに会い、さらにワクワクが高まりました。田舎者の僕にとって、まず名古屋に着いただけでもうお腹がいっぱいです。周りにある建物全てのテッペンを見るためには、見上げないとみることができません。まずそのことにワクワクしました。そして新幹線で東京に向かい、空港に着きました。飛行機に乗って動き始めた瞬間、僕の心は絶好調でした。人生で一番ワクワクした瞬間かもしれません。この感じを忘れないようにしようと思いました。そして長い時間の後、ついにアメリカのデトロイトに着きました。着いた時は真夜中でしたが、ローズさんが僕たちを迎えてくれてホテルまで連れてってくれました。真っ暗で見えなかった周りの風景も明日になれば見られるだろうと期待を込めて眠りました。（佐野・太田）



2日目：8月8日（火）

朝、起きると窓の外になびく星条旗とカナダ国旗を見て、デトロイトに着いたことを実感しました。

まず、デトロイト市のコーディネーターであるローズさんが所属するメディア課を見学させていただきました。たくさんのコンピューターが並び、スタッフが映像編集などの広報活動を行っていました。仕事現場にお邪魔したにも関わらず、スタッフの皆さんが優しく声をかけてくれたので、言葉が通じるのだろうかという不安が少し解消されました。



その後、ローズさんにデトロイトの中心街を案内してもらいました。昨日は、フライトの疲れや、夜が遅く暗かったことで良く分からなかった街を見て、とても大きいことに驚きました。

そして夜には、ホストファミリーと初めて会って、夕食を一緒に食べました。初対面だったので非常に緊張していました。しかし、拙い英語にも関わらず、耳を傾けてくださったお陰で、少しずつ打ち解けて行くことができました。夕食が進んでいくとともに、だんだんと話が弾むようになっていくのがとても楽しかったです。夕食が終わりかけたころ、突如として誕生日会が始まりました。実はこの日は僕の誕生日で、ホストファミリーがお祝いを考えてくれたそうです。まず、アメリカの大きなケーキに驚きました。日本でも、大きなパーティーに行かないと見られないくらい大きなケーキが普通に出てきました。聞いてみると、アメリカではこれが普通のようなのでした。そして、会場にいるみんなで歌を歌って、祝ってくれました。忘れられない日になりました。(高村・高木)



3日目：8月9日（水）

今日はデトロイト市長や、日本総領事と会う日です。緊張しながら豊田市長から預かった記念品を持ち、日本総領事のところに向かいました。領事館は和風だったので、感動しました。南山大学在籍の人が案内してくれたのですが、その人はとてもイケメンだったのが印象に残っています。いよいよ日本総領事と対面を果たし、日本語で話してくれました。「日本は島国だからとても



unique。例えば日本はどこへ行っても他国が見えない。海のみです。しかし、デトロイトなどはカナダが見えて、橋は毎日色々な人が往復している。文化の違いを感じる機会が多い。だから、文化の違いに慣れていて、皆フレンドリーなのだ。」と教えて下さりました。確かに日本人はすれ違う人にこんにちは！などと話しかけないので、そのことを実感しました。途中で一葉さんの調子が悪くなってしまい、7人で行動することになりました。



その後、デトロイト市長に会い、デトロイト市長は犬が好きなどとても優しい人だと分かりました。私が記念品を渡し

た時も、何回も「Thank you」と繰り返してくれて、凄く嬉しかったです。その後、電車で市内をグルグルしたのですが、なんだか急激に眠くなって、ほとんど眠っていました。帰りの車でもずっと寝てしまったので、明日は会話を続けたいです。夜はタコスを食べ、昼も同じような系統のものを食べたことは内緒です。ストロベリーアイスも食べて、甘くて美味しかったです。そのあとアニメが好きと私が言ったので、ホストシスターがアニメを見せてくれました。19時50分くらいにお開きとなったので、今日は早く寝られそうです。(日置・成田)

4日目：8月10日(木)

今日は、Wayne State University と Comerica Park を訪れ、またウェルカムパーティーにも出席しました。



Wayne State University では、この大学の卒業生であり、現在は大学で留学生に関するお仕事をされている方に大学案内をしていただきました。Wayne State University は、とてもユニークで綺麗な大学です。案内していただいた建物の中には、講義に使う教室だけでなく、スポーツジムやパソコンでゲームをする部屋など、日本にはない、とても魅力的

なものが多くありました。さらに建物自体が、日本でよく見られる様なただの直方体ではなく、お屋敷のようにとても美しい見たくをしていました。日本の大学も、勉強や研究のためだけでなく、沢山の楽しみがある場所になれば良いのと思います。

午後はMLBを見に行きました。運良く相手のツインズの先発ピッチャーは前田健太投手であり、とても興奮しました。日本のプロ野球とは全く違い、応援歌が流れない代わりに盛大に色々な音楽を使って盛り上げていて楽しかったです。また、とてもいい場所で見やすく、MLBを肌で実感できてよかったです。人生で1度は行って見たかったので、とても素晴らしい経験となりました。お土産もしっかり買い、たまたまマスコットキャラ



クターにも遭遇し、写真も撮りました。円安でお土産が少し高価でしたが、とても良い経験となりました。

夜はウェルカムパーティーを開いてもらいました。ご飯はバイキング方式でたくさん食べました。ホストファミリーとたくさん会話をしたり、日本で滞在したことのある人達とたくさん交流したりしました。私達派遣団はとても綺麗なコースターをお土産にもらって皆喜んでいました。ホストファミリーとさらに仲を深められたと思います。

野球観戦と大学見学で体力を使い過ぎて、とても疲れが溜まっているのでしっかり寝て、明日のナイアガラ日帰り旅行を楽しみたいです。また、乾燥もひどく、喉をやられつつあるので、しっかりと水分補給をしていきたいと思いません。(藤田・山本)

5日目：8月11日(金)

朝がとても早く眠たかったです。ホストファミリーと集合場所に行きました。大きいバスでカナダに向かうのですが、国境検問所の所で1時間ぐらい待たされたのでその間にお菓子を食べました。持ってくるお菓子も色々で、ぶどうを持ってきている人もいました。

予定よりも大幅に遅れてナイアガラの滝に着きました。クルージングに乗りました。遠くからでも迫力は凄いのですが近くで見ると飲み込まれそうで怖くなるぐらいの迫力でした。カップを来て乗りましたがびしょびしょで、1番滝に近かった時は雨に打たれている感覚でした。スマホもびしょびしょです。



その後ホストファミリーと一緒に Apple Beans という飲食店に行きました。インターネット環境が無かったため、なんとか読むことができたメニューを選びました。オフライン翻訳はあった方が良かったです。サンドイッチを選びました。そこまで大きくないのですが日本と違い厚く、味も濃かったため半分ぐらいしか食べられませんでした。



その後お土産を買いに行きました。メープルシロップとクッキーを買いました。ホストファミリーに頼んでアイスクリームを食べました。夜遅くに帰ってきたので体力的にキツかったのですが、圧倒的な迫力を持つナイアガラの滝を見に行けて嬉しかったです。

明日から初めての休日を迎えます。派遣生のみんなが居ないのは少し不安ですが、ホストファミリーともっと思い出を作れるように積極的に話していきた

いです。(太田・高村)

6日目：8月12日(土)

今日は朝7時に起きましたが、部屋から出たのは8時半でした。ちょっと遅めです。そして、朝ごはんを食べました。今日は、朝からホストファザーが大量の肉を用意していたので、パーティーやるのかな?とっていました。朝ごはんを食べた後、ようやく日本のお土産を渡すことができました。金のミルク抹茶味がとても好評で、喜んでくれたので嬉しかったです。

そしてホストシスターとジェンガをしたり、ホラーゲームをしたりしました。日本の妖怪ベースのホラーゲームだったので口裂け女等が出てきて、凄く楽しかったです。その後は High School Musical という映画を見ていたのですが、人がどんどん集まって来て親戚でパーティーするのかな、とっていたらすぐ横に佐野翔太君が立っていて、今日一番驚きました。その後2人でWiiスポーツやって懐かしくて楽しかったです!!! さらにどんどんデトロイト派遣学生メンバー達が来て、(リーダーの三宅さんもいらっしゃいました!!!) バレーボールをしましたが、花音ちゃんの靴が剥がれて花音ちゃんは靴を買いに行きました。翔太君はずっと外で遊んでいました。フリスビーをしていたと思います。私は音楽聞きながらポップコーン食べまくりました。アメリカはポップコーンが家庭に大量にあるので最高です。日本でも沢山食べたい!!! と思いました。



そして、夜にさしかかり、大きいマシュマロを食べたり、ブランコをしたりしました。皆が帰った後は High School Musical の続きを見ました。充実した1日でした!!!! (高木・日置)

7日目：8月13日(日)

今日は朝から家族みんなでショッピングに行きました。来週の火曜日にバレーボールをするということで、まずはスポーツ用品店に連れて行ってもらいバレーボールシューズを買いました。とてもお気に入りの柄のものを買ったので満足でした!

次にアメリカで有名なボディーソープのお店「Bath & Body Works」という店に行き母親のおつかいをしました。とても良い香りのボディーソープなどをたくさん買いました。

そして、夜には鈴桜さんのホストシスターの誕生日パーティーがあるので妹と一緒に誕生日プレゼントを買いに行きました! 夜は鈴桜さんのホストシスター

ーの誕生日パーティーはものすごく盛り上がりました。みんなとてもノリノリで踊っていましたが、僕は踊ることが苦手なのでみんなの踊りを「上手でいいなあ」と羨ましいと思いつつ見ていました。(山本)



今日は教会で朝8時から10時まで Sunday school を受けて、その後2時ぐらいまで教会で聖書を読んだり、歌ったりするのを聞きました。また、私のホストマザーが教会のシスターであるため、教会の他のシスターの方や牧師さんなど、日曜日のキリスト教の礼拝の裏側を知ることができ良い経験になりました。

その後ホストシスターの同級生6人とパーティーをしました。そこではホストシスターに縁のあるガーナ料理をホストマザーが振舞ってくれました。特にスパイシーなピーナツバタースープが美味しかったです。皆で音楽に乗りながら踊りまわりました！（成田）

8日目：8月14日（月）

今日の予定は、DENSO と、芸術家の方のアートスタジオの訪問でした。まずその前に、フェアウェルパーティーで必要なものを買うため、ローズさんにローカルショップへ連れて行っていただきました。さすがアメリカ、パーティーグッズが非常に充実しており、買い物が楽しくて仕方なかったです。当日、自分達がどこまで楽しいパーティーにできるのか、少し不安もありますがとても楽しみです。

DENSO では、長年技術者をやっていらっしゃるという方に、施設を案内していただきました。そこでは主に、出荷する前の車の点検が行われていました。車がどれだけ過酷な環境に耐えられるのか、様々な設備を使って限界を追求していらっしゃる技術者の方々はとても格好よかったです。そして何より、日本の企業がアメリカに進出し、世界で活躍していることを実感でき嬉しかったです。



午後は芸術家として活動している家族のアートスタジオに訪れました。ドアを開けるとその周りには金属の彫刻でできたような作品がたくさん飾られていました。この場所で皆がそれぞれ一つずつ作品を作りました。三つの様々な形の木のブロックを使って作品を作るというものです。



自分は意外に想像力があると思っていましたが、いざ取り掛かってみると難しかったです。バランスよく見せたり、なにか工夫して作ってみたり考えているとすぐに時間が過ぎていってしまいました。最後にみんなが作った作品を見ました。絶妙なバランスで立っているものもあれば、シンプルさが逆に魅力を引き立てるようなものもありました。やはり作品を作るのは面白いと思いました。
(藤田・佐野)

9日目：8月15日(火)

今日は、朝から寝坊して、いつもの集合場所に向かいましたが、生徒が5人しか居ませんでした。欠席の3人はコロナ検査を受けに行ったらしく、鈴桜さんは昨日の夜、熱を出したと聞いたのでとても心配でした。その後、3人とも陰性だと聞いた時はすごくホッとしました。

そして若干遅れてデトロイト美術館に行きました。デトロイト美術館では沢山の展示物がありすごく感動しました。ミイラを見た時に一部の人のテンションが爆上がりしていました。私もドキドキしていました。昼ご飯はバイキング形式で、サラダとスープを食べました。スープには弾力のある餅か何か(名前が分からない)が入っていて、美味しかったです。サラダもたくさん食べました。相変わらず佐野君はバクバク食べていてびっくりしました。食べた後はヨーロッパ風の美術を見に行きました。ステンドグラスやルネサンス的な絵画、宗教絵画がとても美しかったです。ゴッホやモネも見られました。そして、とうとう撮った写真の枚数が1000枚を超えました。お土産屋さんでは、爆買いしました。コースター、コップ、手帳、マトリョシカなど、満足です!!外国での買い物もだいぶ慣れてきました。



帰りはホストファザーがジャズコンサートに連れて行ってくれました。三宅さんとも会いました。ハイタッチしたりして楽しかったです。家ではゲームをしたり、(UNO、オセロ、サイコロゲームなどなど)映画を見たりしました。アメリカの映画のハッピーエンドは最高です!今日は楽しかったです。明日も元気に頑張ります!! (太田・日置)

10日目：8月16日(水)

今日は午前中にデトロイトの歴史を学べる Cultural Center Historic District に行きました。ミシガン州の誕生から今に至るまでの様々な出来事や当時の街

並み、車などが飾ってありました。日本が明治時代である時のデトロイトの街並みの雰囲気は日本よりもおしゃれだったので、とても印象に残っています。また、私が1番知りたいと思っていたデトロイトの音楽の歴史についての展示があり、デトロイトの作曲家を知ることが出来てとても嬉しかったです。



午後からは地域の高校生との交流をしました。デトロイトで日本語を教えている先生が日本語を話した際、日本語の発音の良さにとても驚きました。ここでは先生が用意してくれたミニゲームを一緒に行いました。その際デトロイトの高校生の人たちは日本語で話し、私たちは英語で話しました。高校生の人たちもみんな日本語が上手で少し日本語でお話をしました。ミニゲームが終わった後はそれぞれ自由に交流し、「この言葉は日本語ではこのように言うのですよ」と教えてあげたり、逆に教えてもらったりとお互いの言語を共有しあうことが出来てとても良い体験が出来ました。これを機に違う言語のコミュニケーション力をもっと身に付けられるように頑張りたいと思いました。
(高木・山本)



11日目：8月17日（木）

今日は Farewell パーティーでした。まず午前9時からみんなでパーティーの買い出しに行きました。それから教会に行き、パーティーで使う楽器を借りました。その後、ローズさんと派遣生の二人とカールさんでコストコへの買い出しに行きました。



午後1時に会場に着き、沢山の荷物を車から降ろし、その後は料理を作る人と、会場準備をする人の二手に分かれました。キッチンでは、白玉ポンチ、そうめん、4種類のおにぎり、サラダ、フライドチキン、ホットドッグなどを作りました。

会場では、ステージなどの装飾や楽器の準備、出し物の最終練習などをしました。途中で風船をふくらます機械が壊れたり、缶切りが無かったりとトラブルがありましたが、万全の準備を整えてパーティーが始まりました。オープニ

ングも好調に始まりみんなが一斉に食べ物を取りに行き始めました。会場の中ではみんなの喋り声が途絶えることなく順調にパーティーが進んでいきました。ソーラン節を踊ったりもしました。

パーティーも終盤にさしかかってきて、手紙を読む時間がやってきました。会場は静かになってみんながその言葉に注目しました。自分のホストファミリーでないのにうるっとくる場面が何度もありました。そして自分の番が来た時も同じようにホストファミリーに思いを伝えました。パーティーは大成功に終わりました。この日々がもう終わってしまうと思うと悲しくなりましたが、残り少ない日々も楽しもうと思いました。(成田・佐野)



12日目：8月18日（金）

まず、フォードの工場見学に行きました。広大な工場の中には、貨物列車や大型トレーラーが走っており、大迫力でした。製造ラインの見学では、ベルトコンベアーに載せられた車や部品が運ばれていました。何よりも驚いたことは、そこで働く人の服装です。ジーンズに半袖という私服で作業をしていました。そこは、日本と大きく異なる部分であり、なぜそのような違いがあるのか知りたくなりました。



その後、アフリカ系アメリカ人の歴史に焦点を当てた博物館に行きました。奴隷労働の時代から、現在の権利を獲得するまでの歴史が再現されていました。特に、奴隷船を再現したコーナーは恐ろしいほどリアルで、その場にいるだけで怖さを感じました。人間に負の歴史があったことを忘れず、二度とこんな世界にしないと強く思いました。

この日の最後は、ホストファミリーも参加して、アメリカとカナダを隔てる川でクルーズをしました。この頃になると、デトロイトで過ごせる時間が本当

に僅かなことを考えないようにしても、頭をよぎるようになっていました。だからこそ、最後に、毎日見てきた川の向こう岸のカナダとデトロイトの街をずっと眺めていました。しばらく眺めていると、川辺を散歩している人達が手を振ってくれました。それも、一人二人ではなく、十数人が手を振ってくれました。人と人とは、言語がなくても交流でき、言語があれば、もっと自分のことや相手のことを知ることができると感じました。(藤田・高村)

13日目：8月19日(土)

ホストファミリーとの別れの時です。この10日間、毎日が楽しくてあっという間でした。前日、最後までホストファミリーと遊んでいたのが早起きがとも辛かったです。出発する前にはピザのぬいぐるみをくれました。ホストファミリーと最後のハグをした際マザーがRのネックレスをくれました。Rは私のイニシャルです。受取った際10日間の楽しい思い出が出てきて寂しくなったのか涙が止まらなかったです。

このプログラムに参加出来て本当に良かったし楽しかったです。協力してくれた人々に感謝し、できる限り恩返ししたいです。

2週間のホームステイがあっという間に終わり、最終日は朝早くから空港に向かいました。ホストファミリーとは空港で最後の別れとなり、みんな別れを寂しがっていました。別れは寂しいですが、最後まで笑顔でいたかったので、保安検査場にたどり着くまでずっと笑顔でいるようにしました。ホストファミリーも笑顔で送ってくれたので嬉しかったです！このデトロイト派遣に参加することが出来てとても充実した2週間を過ごせました。本当にありがとうございます。(太田・山本)



14日目：8月20日(日)

飛行機の中では余韻に浸っていました。一生の思い出になると思います。行きの飛行機に乗った時はワクワクでたまらなかったのですが、アメリカから日本に帰る時には色々なものが込み上げてきました。この二週間はきっと今まで高校生活よりずっと価値があると思います。欲を言えばあと一週間、二週間延ばして欲しいと思いましたが、この二週間に後悔はありません。そのくらい充実した二週間でした。そして、このような経験が出来たのも、恵まれた環境にいるからだだと思います。これは決して誰もが経験出来るわけではないので、これからも自分に誇りを持って生きていこうと思います。(高木・佐野)

レポート

皆さんはアメリカの生活はどのようなイメージを持たれますか。アメリカと日本の生活の違いを書いていきます。

1 移動編

アメリカではほとんど車で移動します。徒歩 20 分程度でも車で移動します。私達派遣生も美術館などの移動の際はローズさんが運転する車で移動しました。そして移動する際によくスマートフォンのマップを使っていました。そして向こうにはフリーウェイ（日本で言う高速道路の無料版みたいなもの）をよく使いました。道は舗装されているところがあったりなかったりします。日本にもスピードを落とさせるための段差がありますがアメリカはとても段差が大きいです。ホストファミリーはスピードを落としてくれたため大きく揺れるだけでしたが、スピードを下げずに行くと一瞬浮くらしいです。車内は音楽をかけてみんなノリノリです。

デトロイトではモノレールがあり乗ってみました。日本では切符や IC カードを使いますが、そこでは下の店でコインを購入してゲートにコインを入れてホームに行きました。数分するとモノレールが来ました。日本では揺れる際アナウンスを入れていましたが向こうでは常に揺れるため不思議な感覚で少し酔いました。

2 食べ物編

アメリカのスーパーには大きいものが多く売っているイメージが誰しもあるかもしれませんが正解です。ただ、一応小さいものも売ってはいます。大きなデパートでは服を売っているようなところもあります。アメリカではペットボトルのまとめ売りをするときはラップみたいなものに包まれています。ショッピングモールは日本と一緒でした。H&M は日本で言うユニクロみたいな感じだそうです。アメリカでは色んな料理屋さんがあり私達もメキシコ料理屋に行きました。肉が分厚く大きいので肉以外食べられませんでした。タコスも美味しそうでした。

ホストファミリーがピザを作ってくれ、生地から作るのにとっても驚きました。初めて棒を使ってピザ生地を伸ばしたのですが、伸びてもすぐに戻ろうとしてくるので力が多く要り大変でした。

私は大きなハンバーガーを食べたかったので、ホストファミリーに言って連れて行ってもらいました。私が行ったのはデトロイトバーガーです。ハンバーガーは大きく分厚いのが特徴的で、一番初めにナイフに目が行きます。日本のようにハンバーガーをそのまま食べるのではなく、刺さったナイフで自分の持てるサイズにカットしていただきます。分厚いのであごが外れるかと思いましたが肉々しいハンバーグから溢れてくる肉汁、それに合うバーベキューソースがめちゃくちゃ美味しかったです。もち



ろん大きすぎて全ては食べられませんでしたが、アメリカでは持ち帰り用の容器があり家に持ち帰りました。ホストファミリーによると夜食に食べるそうですがわたしには無理でした。

関わることの大切さ

佐野 翔太

僕は英語が大好きです。洋楽をよく聞かし、ユーチューブでもよく海外の動画を見ます。将来は海外の大学に行ってみたいとさえ思っています。しかし、それと同時に自分はシャイです。話しかけることが苦手だったり、話しかけることが出来ても、話を続けるのが苦手だったり、自分の気持ちを素直に表現するのが苦手だったり、相手の気持ちを理解するのが苦手だったり、コミュニケーション全般が苦手です。学校でもそんな感じです。「なんでもない」が僕の口癖です。言いたいことがあっても自分に自信がないし、もしかしたら相手を困惑させてしまうかもしれない、そんなことばかりいつも考えていて、言いたいことが言えませんでした。

今回の派遣で気付かされた事があります。それは、人と関わることの大切さです。先ほど言ったように僕はシャイです。コミュニケーションが苦手です。でもアメリカにいる間だけはシャイじゃない人間でいようと決めました。これは自分を少しでも変えるための一つの実験でした。積極的に話したり、笑顔や顔の表情を豊かにしたり、自分に出来ることは精一杯やってみました。二週間をまるで別人のように過ごしてみました。そうすると、自分は今まで表面でしか相手を見ていなかったことに気付かされました。相手の本当の性格や望んでいることといった内面的な部分は、相手とのコミュニケーションを通じてでしか知ることができません。しかし、自分は人と話すのが苦手だったので相手のことや気持ちをよく理解することが出来なかったのだと思います。しかし、自分がアメリカで人と積極的に関わるようになってから、相手のことや気持ちを少しずつではありますが立体的に理解できるようになった気がします。その人の人間性や好きなもの、嫌いなもの、様々な側面を理解することが出来ました。

英語を使うことは難しいです。発音だったり単語だったり、まだまだ分からないことだらけです。でも、コミュニケーションの為に道具は言語だけではないことに気づかされました。ジェスチャーや顔の表情での表現はそのいい例だと思えます。実際、アメリカでは何回もジェスチャーを使いました。サッカーの試合をテレビで観ていた時のことです。日本語では「これがこうで今こうなっている」といったように、状況を説明することが出来ます。しかし、英語が未熟な僕はそれを英語で完璧に言えるような力はありませんでした。でも単語を列挙し、体や手を使ってジェスチャーで表現しても案外通じる事が分かりました。恥ずかしがらずにどんなことをしてでも相手に伝えてやる！というような意志を持つことが大切だと分かりました。

人と関わることは相手の考えや気持ちを理解することに繋がるし、何より自分を改めて知ることが出来ます。人と関わることは自分の人



物像を形作るためにも重要だと思いました。そして、人との関わり方は口を通してだけではありません。手や体を使ったジェスチャーという言語もあれば手話という言語もあります。だから僕が勉強すべきものは英語だけではなく、手話や人と関わり方も勉強すべきだとこの派遣で気付かされました。

コミュニケーションの重要性

高木 花音

はじめに

デトロイトでの2週間の生活を通じて、私はコミュニケーションの大切さについて新たな洞察を得ました。デトロイトの文化と人々が、言語だけでなく、感情を表現し、自分をアピールする方法について教えてくれたことに感謝しています。この経験を通じて、コミュニケーションは単なる言葉の交換だけではなく、感情や表現を通じて深化するものであることを理解しました。

1. 言語の壁を超えるコミュニケーション

最初、私は言語の違いによるコミュニケーションの障壁に直面しました。デトロイトの方々とのコミュニケーションが難しかった瞬間もありましたが、それを乗り越えるために努力しました。言葉だけでなく、ジェスチャーや表情を使って自分を表現し、相手の意図を理解しようとしていました。これにより、ホストファミリーや現地の方々とのコミュニケーションをとる時、相手に私の伝えたいことが通じるようになりました。また、私も相手の伝えたいことが少しずつ分かるようになっていき、より充実した経験を得ることができました。



2. 感情を表現する大切さ

デトロイトの方々には感情をしっかり表現し、楽しい瞬間にはダンスや歌を通じてそれを表現することがありました。私はバースデーパーティーに参加させてもらった時その文化に触れ、自分も楽しい感情を表現する重要性を学びました。ダンスを踊ることで、他の参加者との絆が深まり、楽しい時間を共有することができました。1人でみんなの前で踊った時は沢山褒めて貰え、そのおかげで沢山の参加者の方々とお話することが出来ました。感情を表現することは、言葉だけでなく、身体言語や表現を通じても行えることを実感しました。

3. コミュニケーションの多様性

デトロイトでの経験から学んだ最も重要なことは、コミュニケーションは多様であるということです。言語だけでなく、身体言語、表現、そして文化的な要素がコミュニケーションに影響を与えます。相手を理解し、自分を表現するために、これらの要素を組み合わせることが大切です。言語が通じないからといって諦めるのではなく、自分の伝えたいことを伝えるためには何をすればいいのかということ自分なりに考えて実行してみることで、その行動によってよ

り良いコミュニケーションがとれるということを知りました。

結論

デトロイトでの2週間の生活を通じて、コミュニケーションの大切さと多様性についての貴重な教訓を得ました。言語の壁を越え、感情を表現する方法に心を開くことは、深いつながりを築く手段であることを理解しました。将来のコミュニケーションにおいて、これらの経験から学んだことを活用し、より豊かな人間関係を築いていきたいと思えます。

レポート

高村 和歩

僕は、デトロイトに向けて出発する前、アメリカと日本の文化の違いを学ぶという目標を立てていました。その時は、文化というと、家の構造や町並みなど、形あるものばかりを思い浮かべていました。しかし、僕が感じた一番大きな文化の違いは「あいさつ」でした。一見するとたいした事のないように感じますが、アメリカでの体験をもとに考えてみるとこれまでとは違うことが見えてきました。

アメリカでの経験の中で、特に印象に残っているのはホテルのエレベーター内でのことです。僕は、レストランで朝食を取るためにエレベーターに乗りました。しばらくして、エレベーターは別の階で止まり、一人の男性が乗ってきました。そして、僕を見た途端「Good morning. How are you.」と声をかけてきました。僕は正直に言ってびっくりしました。日本のエレベーターでは、他の人が乗っていても静かにしているが当たり前だと思っていたからです。その時の僕は、たまたま話しかけてきただけであって、その人が特別なだけと思っていました。その後、デトロイトの街を歩く中で、僕の考えは間違っていたことに気づきました。なぜなら、街をただ歩いているだけで挨拶をしてくれるのです。この出来事は、僕に大きなことを気付かせてくれました。挨拶が心を近づけるということです。中学生の頃、道德の授業や先生の話の際に「挨拶をしましょう。」とよく言われました。その時の僕は、なぜ挨拶をしなければならないのか分かっていませんでした。そして、恥ずかしさから、挨拶をしなくなっていました。高校生になり、通学距離が伸び、これまでとは比べ物にならないほど多くの人とすれ違ふようになりました。しかし、挨拶をする人は誰一人いませんでした。そのことに甘えて、高校生になってからも、挨拶をすることは、あまり多くはありませんでした。

話が少し脱線しましたが、僕が一番言いたいことは、挨拶の重要性を周りの人に伝えなければならないということです。多くの日本人は、義務教育の中で、挨拶が重要ということ、何度も言われてきていると思えます。しかし、町中で挨拶をしている人は少ないのが現状です。それは、挨拶の重要性が伝わっていないからだと思えます。僕が考える挨拶の重要性とは、人と人との距離を縮めることです。僕は、母国語ではない英語での会話だったのにも関わらず、挨拶があるだけで日本人よりも親しく話すことができました。これは、挨拶によって人と人との距離が大きく縮まったからではないでしょうか。

言語、宗教、考え方、全てが違う相手でも、挨拶をすることによって距離を縮めることができます。だからこそ、日本をもっと挨拶あふれる国にしていきたいです。

私は元々海外の文化に興味があり、アメリカのホームドラマを見たりインターネットで色々な国の情報を調べたりする事が小さい頃から好きでした。だからこの 2 週間で体験したパーティーを沢山することや知らない人でも挨拶すること、相手を褒めたりすることなど、元から知っている事の方が多いと思っていました。しかし実際に体験して、私はまだまだ知らないことの方が多いと知ることが出来ました。その内容を少し紹介しようと思います。

① 活動時間が長いこと

サマータイムがあり夜暗い時間が日本と比べてとても短かったです。最初にデトロイトに着いた時は飛行機が遅延し深夜を回っており、日本の深夜と同じ様な暗さだったためあまり気付きませんでした。その次の日、外が暗くなり始め、そろそろ午後 7 時になる頃かなと思いきやスマホの時計を見ると午後 9 時近くでびっくりした事を今でも覚えています。

② アメリカ人の食欲旺盛さ

私は元々少食なため、この 2 週間でいちばん苦労するのは食べ物のことだろうと勝手に思っていました。本当にその通りで、予想外の食欲をアメリカ人は持っていました。初めてホストファミリーと私で夜ご飯を食べることとなった時、ファストフード店に行きました。ハンバーガーだったのですが、私はその日お昼ご飯を食べすぎてしまい、食べられないと言いました。するとホストファミリーが何かアイスでもいいから食べて欲しいと言ってくれ、その通りに小さなアイスのひとつだけ食べたいと言いました。すると出てきたのが全然小さくない、むしろ大きなバニラアイスでした。頑張っただけそのアイスは食べ、その時に私はこの 2 週間で自分の胃を大きくしようと心に決めました。しかしそれは叶わず、お昼ご飯を食べたら大概夜ご飯は食べられませんでした。

③ やっぱりパーティーが好きなアメリカ人

アメリカのホームドラマでパーティーをするシーンが沢山出て来ることは知っていましたが実際もそうでした。元々派遣団のスケジュールにあるパーティーは 2 つでしたが、自分が把握しているだけでその他にも 3 つのパーティーがあり、2 週間で合計 5 つのパーティーがありました。やっぱりアメリカ人はパーティー好きでした。

④ ホームレスの方々

自分が都会に住んでいないということもありますが、私はホームレスの人達を見たことがあまりありませんでした。でもこの二週間は毎日見る機会がありました。ホストマザーに聞くと「私は市役所でこのような人達を助けているのよ！」と言っていました。

⑤ デトロイト市は豊田市と比べて寒い

2 週間の滞在のために持っていく服をその時の日本の気温に合わせて決めてしまいましたが、それは安易な考えでした。現地の方の写真も見て決めたはずでしたが、お盆終わりのデトロイトは日本の 10 月上旬ぐらいの体感でした。確かによく考えてみる

と、デトロイトの近くの五大湖は氷河湖であるし、デトロイトは北海道と同じ緯度にあると気付きました。

上の 5 つ以外にも、実際にホームステイを体験しなければ分からなかったことが沢山ありました。これらを家族や友達に伝えていきたいと思います。

アメリカと日本の“食”への考え方の違い

日置 千咲乃

私がアメリカへ行って一番驚いたのは食事の量です。アメリカでの S サイズは日本の L サイズです。だからでしょうか、日本へ帰ってきて、スタバの L サイズが小さく見えたこともあります。アメリカは食事の量が多すぎて、食べきるのに時間がかかりました。とても苦労しましたが、私が語りたいのはそこではなく、“店で残したものを持って帰る”ということが当たり前の習慣になっているということです。私は、その習慣が素晴らしいと思いました。この習慣は、食品ロスを減らすことができます。アメリカという大国でこの持ち帰り習慣が定着しているのに、何故日本では見られないのか、日本で定着させるにはどうしたらいいのか、考察してみようと思います。

まず、何故アメリカにこの習慣が定着し、日本には定着しないのかについてです。理由としては両国の家庭料理に対する考えに深く密接します。アメリカでは、家庭料理は日本ほど丁寧には作りません。皿やコップも使い捨ての紙製のものが多いです。実際に私のホストファミリーの家でも毎日使い捨てのものを使用していました。日本では、主食、主菜、副菜、と三段階に分かれた食事が出されるのが当たり前



なっていて、毎日デリバリー、カップ麺、冷凍食品、ということは他の国より少ない方でしょう。では、何故アメリカでは家庭料理を日本ほど丁寧に作らないのか。まず、アメリカでは日本より共働き家庭が圧倒的に多いことから、夫婦どちらも“丁寧にご飯を作ることが仕事”と考えないのではないのでしょうか。2022 年時点のジェンダーギャップ指数はアメリカが 27 位、日本は 116 位です。日本ではまだ多くの家庭で女性が家事をしているところが多いです。女性が仕事をしていても、「女は家事をやるべきだ」という考えが根底にあるため、夕飯を家族分作らざるをえない家庭も少なからずあるでしょう。私の同級生の多くも母親が料理を作っているようです。つまり、日本では家庭料理が手作りの家庭が多いため、店の残った食事を持ち帰っても食べる機会は無く捨てるだけになってしまいます。スーパーで材料を買う方が日本人にとっては当たり前なのです。さらに日本人は栄養などを意識する人が多数いて、毎日店の料理だと体に悪いと考える人もいます。その点アメリカ人はそのような事を全く気にせず、毎日効率重視で食事を探っています。(平日忙しい時は食事準備が早ければいい、など)。今回のホームステイでこれらの違いを特に実感しました。

では、日本に持ち帰り習慣を普及させるにはどうしたらいいのか。すぐに

は難しいと思いますが、日本にもお持ち帰りパックを積極的に設置し、お客さんにレシートを渡す前に直接通達すれば少しずつ持ち帰る人の割合は増えるのではないかと思います。持ち帰りたいと考える人はある程度居ますが、不可能だと諦めてしまっています。したがって、店側から可能であると通達した方が良いと思います。

今回、アメリカに行き、異文化の習慣に触れることで、自分の中の新たな国際的視点が開け、日本の社会問題について考えることができました。将来、この経験を生かしてより良い社会を創る人になりたいです。

違いとの向き合い方

藤田 結

文化の違いを乗り越える必要はない。私はデトロイトでの2週間を終えて、そう感じました。当然ですが、これは決して、異なる文化をもつ者同士が距離をとるべきという意味では全くありません。むしろ、私は今回の派遣を通して、自分と違う文化をもっと知りたいと以前にも増して強く感じています。日本とアメリカの違いを肌で感じたこの2週間、その中でも特に、ホストファミリーと過ごした時間の中で、文化の違い、文化の壁について考える機会がたくさんありました。

一番考えさせられたのは、ホストファミリー3人に日本の文化について聞かれ、夕食後6時間にも渡り文化の違いについて語り合った時のことです。ホストファザーに、「日本人は親しい人とでもなかなかハグをしないそうだけど、あなたは家族とのハグを切望しないの？」と聞かれたことで、日本とアメリカの国民性の違いをひしひしと感じました。私は実際、デトロイトに行ってから色々な人にたくさんハグをしてもらい、あたたかくて良い文化だなあと心の底から思っていたのですが、日本の家族からのハグを切望しているか、と聞かれ、この文化を日本に持ち帰ったらどうだろうと想像してみると、何とも言えない気まずい気持ちになったのを覚えています。そして、きっと私のその気持ちが顔に出ていたのでしょう、ホストファザーに、oh...と言われてしまいました。日本人の感覚では、ハグを切望しているというのは普通じゃない、どうしても変だと感じてしまう。ハグで愛情表現をするアメリカでは、それは寂しいことだと受け取られてしまったのかもしれません。しかし、このように共感できない、分かり合えないことがあるのは、別に悪いことではないよなあとは思いました。正直、このような価値観の違いを乗り越えるのは不可能なのではないかと思うし、育ってきた環境が違うのだから考え方が違うのは当然で、その違いを知ることが重要なのだと感じました。

この2週間、このエピソードだけにとどまらず、日本とアメリカの様々な違いに私達はどう向き合うべきなのか、考える瞬間はたくさんありました。そして最終的には、違いを乗り越えることはできないという結論に至りました。上のエピソードからも感じたとおり、お互い、自分の習慣や考えを無理やり変えようとするのは簡単なことではなく、それまでの自分を曲げることで大きなストレスもかかります。だから、違う者同士が、違いを乗り越えて共存することは難しい。国際交流をする上で必要なのは、違う者同士が互いに相手にすり合わせていくことなのだと気づかされました。生活も、考え方も違う人たちがいるということを知り、違いを受け入れ、違うことそのものを尊重すること、そしてそれを徹底していくことで異文化間の交流はより円滑に、より活発に進むのではないのでしょうか。

今回の派遣を通して僕は1つ気付かされたことがあります。それは国を超えても共通の趣味でコミュニケーションをとることが出来ることです。僕は小学校4年生の時にバレーボールを始め、今でも高校でバレー部に入ってプレーを続けています。ホストマザーにもバレーをすることが大好きだと伝えると、「花音のホストファザーがバレーをプレーしており、来週の火曜日に集まるからいこう！」とバレーをする機会をくれました。アメリカでまさかバレーが出来るなんて予想もしておらずとても嬉しかった反面、自分の意思などのコミュニケーションをとれるかとても不安でした。

いざ火曜日。この日のプログラムを終えて、とある教会の体育館に向かいました。そこで見た光景は、若い人から60代の人までの幅広い年齢層、国を問わず色々な国の方々が混ざって試合をしていました。バレーシューズを履いて、ストレッチをして



いる時に沢山の方々が、「Where are you from?」「Oh! Japan is a very good country!!」「Do you play volleyball at school?」と声を掛けてくれ、会話をする事が出来てとても嬉しく、コミュニケーションをとることが出来て安心しました。

試合が始まると、意識をしなくても自然にチームの方々とコミュニケーションをとることができ、とても驚きました。バレーボールはお互いに声を出さないと繋ぐことが出来ないスポーツです。はじめは緊張しており、声を出しにくかったですが、段々声が出てきて、「OK!」「Nice spike!」「Nice receive!」など声をかけハイタッチをして楽しんでプレーすることが出来ました。味方のチームの方に限らず、敵チームの方とも会話をして、とても楽しい時間でした。

このように異なる言語、人種でも共通の趣味を通して言語の壁を越えて楽しむことが出来るということを学びました。一人ひとりが様々な趣味を持っていると思います。その趣味が他の国の方と繋がる架け橋となり、コミュニケーションをとることが出来るきっかけとなり会話を楽しむことができると分かりました。これからも自分の趣味を大切にしていき、国内だけではなく国外の方々と共有していきたいと思いました。



派遣を終えて

〈リーダーになる決意〉

この派遣団のリーダーを依頼された時、私の頭には2つの声が響きました。一つは『えっ、私にできるの?』という疑念の声、もう一つは『またアメリカに行けるの? やってみたい!』という興奮の声でした。8名の高校生を引率する責任の重さを考えるともちろん不安はありましたが、これは私のアメリカでの経験を活かせるチャンスだと思い、参加を決意しました。渡航の前に、自分自身の使命を明確にしました。まず、積極的に人と交流すること、派遣団の安全と健康を管理すること、高校生と日本のスタッフ、現地のスタッフと円滑にコミュニケーションがとれるように調整することなど、全参加者にとって充実した旅になるように願いながら旅立ちました。

〈ホームステイでの新たな発見〉

この旅行で2週間のホームステイを経験したことで、私にとって新たな発見がありました。渡航前は「随分と英語をしゃべってないけど大丈夫かなあ。」などと思っていたのですが、そんなことを考える暇もなく、滞在中は夢中で英語を話していました。アメリカ人はとにかく話をするのが大好きです。私のホストマザーとホストファーザーも「いい車に乗っているねえ。」とか「あなたの服すてきね。」など、知らない人と気軽におしゃべりをする場面を何度か目にしました。それは、「自分は怪しい者ではない」ということをアピールしている面もあるのかもしれませんが、単純に人と話すことが好きで世間話を楽しむという文化が根付いているように思います。その余裕がアメリカ社会にはあるように思いました。そしてまた、自分の意見を持ち、それを自由に表現することが推奨されている文化が、私にとっては新鮮で魅力的でした。

ホームステイを通して新しい環境に飛び込むことで、言葉の壁を乗り越えて新たな友人を作ることができました。また、世界は広く、多様性に富んでいることも実感できました。異なる文化や習慣を学び、自分自身を成長させることができました。

〈印象深い研修プログラム〉

デトロイト観光の中では、コメリカパークでデトロイト・タイガースとミネソタ・ツインズの「マエケン」こと前田健太投手の試合を観戦できたことが印象的でした。タイガースを応援すべきと思いつつも、マエケンが堂々と投げている勇壮な様子に感銘を受けました。日本人も世界で活躍できるということを実際に見ることができたすばらしい体験でした。

展示物の観賞ではアフリカ系アメリカ人歴史博物館に行けたことが非常に意義深く、人種問題についてさらに理解を深めたいと思いました。特に『And Still We Rise』の展示では、アフリカからアメリカへ連れてこられた奴隷たちが船内で経験した過酷な状況や、アメリカ到着後に競売にかけられる様子が、時には目を背けたくなるほどリアルに表現されていました。アフリカ系アメリカ人の歴史がここから始まり、逆境や困難に耐え、立ち向かってきたことを思うと、なぜ彼らが人種問題に対して敏感に反応するのが理解できました。

異文化交流のプログラムの一環として、現地の日本語クラスの学生と交流する機会

がありました。日本の学生とアメリカの学生がゲームをしながら身振り手振りを交えて英語と日本語でコミュニケーションをすることで、異文化交流の楽しさを学ぶことができました。このような実際の交流を通じて、相手の異なる文化やバックグラウンドを理解することが、国際社会においてますます重要であるように感じました。

〈高校生が主役のさよならパーティー〉

今回の派遣団主催のさよならパーティーは、日本食をおにぎり、そうめん、白玉フルーツポンチと簡単に作れるものに絞り、高校生たちが自分の得意なことを披露できるように計画しました。当日のプログラムにはヒップホップダンス、南中ソーラン節、バンド演奏と歌唱、そして習字とまんが描画のデモンストレーションが含まれ、どれもとても好評でした。学生たちは自分たちの特技を存分に発揮し、ゲストと楽しい時間を共有できました。一般的に日本人は自己表現や意思表示が苦手と言われますが、このパーティーを通じて、少し勇気を出せば日本人も十分に自己表現ができ、社交的になれることを実感できたと思います。

ホストファミリーへの感謝の手紙では、一人一人が自分とホストファミリーとの特別な瞬間や思い出を語りました。この手紙の朗読はとても感動的で、参加者がそれぞれホストファミリーと良好な関係を築き、素晴らしい時間を過ごせたことを嬉しく思いました。

〈未来への架け橋：交換学生派遣事業の継続〉

1965年に始まったこのデトロイト市交換学生派遣事業は、今回、新型コロナパンデミック後、2018年以來5年ぶりの再開となりました。5年前と比べると、残念ながら海外旅行のハードルはかなり高くなりました。アメリカではインフレと石油高騰による物価の急上昇が起き、また、1ドル=145円と円安が進行し、デトロイトへのルートも中部国際空港からの直行便が無くなり、羽田→シカゴ→デトロイトと移動時間がかかなり増えました。そのような状況の中、この派遣事業に参加できたことは非常に貴重で、私の人生において大きな財産となりました。

新型コロナ禍でのマスク生活の影響か、デトロイトでマスクをしない生活を始めた直後から参加者が順番に体調を崩し、残念ながら4名の高校生がプログラムの一部を欠席しなければならない状況になりました。しかし、彼らが「アメリカに来てよかった」と話してくれたことが何よりも嬉しく、リーダーを引き受けてよかったと思いました。

派遣事業の再開は、5年前の事業内容の詳細を知る人が少なかったため、多少の混乱や戸惑いはありましたが、参加者は皆、貴重な思い出と経験と共に無事に帰国することができました。派遣団のために多大なご支援をいただいた豊田市国際まちづくり推進課の皆様、派遣団のサブリーダーであるカール・タフさんをはじめとする豊田市国際交流協会の皆様、私たち派遣団を家族の一員として快く受け入れてくださったホストファミリーの皆様、そしてデトロイトではほぼ一人で派遣団の面倒を見てくださったコーディネーターのローズ・ラブさんに深く感謝いたします。デトロイト市と豊田市の交流が未永く続き、この事業を通じてさらに多くの高校生が世界への一步を踏

み出し、活躍されることを願っています。

派遣を終えて

サブリーダー タフ カール

この度、豊田市を代表し第26回デトロイト市交換学生派遣団のサブリーダーとして参加させていただいたことを本当に光栄に思います。2014年、当時、私は豊田市役所国際課の職員として豊田市とデトロイト市の姉妹都市提携事業に携わることになりました。その時、この交流事業が両市やこれまで参加された皆さんにとって、いかに重要な歴史と深みを持つものであるかを知りました。今回豊田市国際交流協会職員の立場で派遣団の一員として参加する機会をいただき、参加する生徒たちにとって“特別で忘れられない体験”となるよう全力を尽くしたいと感じました。今回選ばれた8人の高校生も同じく“特別で忘れられない体験”にしたいとの思いだったのでしょう。彼らは事前準備の研修にも積極的に参加し、これから経験できることへの期待に胸を躍らせ、かけがえのないものにしたいという強い思いを感じました。これは過去の派遣団も皆同じ気持ちだったかもしれませんが、今回の派遣団が他と違うのは、新型コロナウイルスの流行により、4年ぶりの両市間の交流となったことではないでしょうか。新型コロナウイルス流行後の渡航やホームステイについて手探りの部分もあり、両市だけでなく、生徒やその家族にとっても、そしてデトロイト市のホストファミリーにとっても大きな挑戦であったと思います。

この交流事業全体を通じて、細やかな配慮がなされていることに大きな感銘を受けました。デトロイト市の担当者ローズ・ラブさんをはじめ多くの方々に感謝申し上げたいと思います。飛行機の大幅な遅延もあり、デトロイト市到着後、ラブさんに初めてお会いした時、まるで家族のようにハグで迎えてくれたため、私達は彼女の心遣いにほっとしました。また、今回の派遣期間中、体調を崩すメンバーが多かったのですが、ホストファミリーが色々と尽力してくれたおかげで回復することができました。

派遣プログラムのスタートとして、デトロイトにある総領事館とデトロイト市役所を訪れました。総領事館では進藤総領事とお会いすることができ、彼自身の初めての赴任時に英語でコミュニケーションがうまくいかずに苦労した経験談もお話いただき、ホストファミリーやこれから出会う方々との交流に心を開いて積極的に英語を使い、間違いを恐れないことが大切だと激励をいただきました。

マイク・ダガン市長との会談では、豊田市とデトロイト市の60年以上にわたる友好関係から生まれた貴重な成果についてお話があり、この交流の機会を最大限に活かすよう私たちに励ましてくれました。ダガン市長は、姉妹都市提携55周年を記念して2015年に豊田市を訪問したときのことを振り返り、豊田市で受けた温かいもてなしに、自分やデトロイト市民は今でも感謝しており、今回の派遣団の訪問で必ず恩返しをしたいとも仰っていました。この出会いにより、遣団の生徒たちは、豊田市の代表としての役割を認識できたと思います。生徒達が彼らの言葉に熱心に耳を傾けていたのがとても印象的でした。

今回の事業で派遣団の生徒たちにとって最も実りの多い経験だと感じたのは、ルネ

サンス高校の生徒との交流でした。同校の日本語教師であるキャサリン・デイビス先生が、双方の生徒にとって教育的に有意義な出会いとなるように重要な役割を果たしてくださいました。この日、彼女は日本語と英語とのバイリンガルで活動を行ってくださいました。自己紹介や基本的な情報交換をゲーム形式で行い、和気あいあいとした雰囲気の中でコミュニケーションを図ることができ、あっという間に打ち解けることができました。ルネサンス高校の生徒たちが日本語を学んでいたことも、彼らとのコミュニケーションが円滑だった理由の一つだと思います。加えて、ルネサンス高校の生徒の何人かは過去に日本を訪れた経験があり、そのうちの何人かは新型コロナウイルスの流行による制限の中での姉妹都市交流活動として2020年から2022年にかけて実施したオンライン交流プログラムの参加者でした。このような親近感や継続性が、生徒たちに安心感を与えることに繋がったと考えます。今後、このような交流をより重視して実施し、生徒たちが双方で得る情報や経験をより豊かなものにしていくと嬉しいです。

その他にも、ラブさんの出身大学でもあるウェイン州立大学やデトロイト美術館、デンソー、デトロイト歴史博物館、チャールズ・H・ライト・アフリカン・アメリカン歴史博物館などの訪問では、多くの興味深い情報を得ることができました。

派遣団の生徒たちがウェイン州立大学のガイドツアーに参加し、同大学が留学生に提供している多くのサポートについてレクチャーを受け、留学生専用の図書館やその他の施設を実際に見学したことで、学生達は皆魅了された様子でした。留学生のレベルの高さを知り刺激を受けたようで、国際的な生活と海外で学ぶことについて触れる機会になったと思います。

最後に派遣団のサブリーダーとして全体を通じて思うことで締めくくりたいと思います。派遣団が豊田市からデトロイト市を訪問する8月というのは、デトロイト市の学校が夏休みであるため、学校や生徒との調整が難しい時期であるという課題があります。しかし、あらためて今回の派遣で強く思ったことは、学生同士の友好を深める活動を増やすことができると、より意義深いプログラムになるのではないかということです。そのためには、デトロイト市の高校の理解が必要となります。夏休期間であるデトロイト市の高校生にとって、もっと参加しやすくなるためのインセンティブを与えるなど、工夫が必要だと感じました。そのような条件の中で、派遣前に学生同士のつながりや関係を築くことができれば、このプログラムは参加者全体にもっと大きな意味を与えることができるだろうと考えています。

楽しかった最高の思い出

太田 鈴桜

〈派遣前〉

海外に行ってみたくて思っていました。高校に入ったばかりだからという理由で高校応募の海外交流を諦めた後、この募集を見つけました。高校応募の方は毎年ありますが、このデトロイト派遣は2年に1回と知り、この機会を逃したら3年生の受験期になってしまうため受けようと思いました。選考試験の集団討論は上手く自分の

意見を言えた気がしました。面接では、やりたいことを伝えられて面接官の方が笑ってくれたため楽しかったのですが、これでは駄目だ、もっと英語勉強しなきゃなと思いました。合格を頂いた時は信じられなかったです。合格を頂いてから数回の研修をしていくなかで派遣生同士の仲もどんどん深まっていくので、その部分の心配はほとんどなかったです。派遣生同士高校も違い、私の場合は環境も違ったので物凄く刺激を貰いました。前回派遣生の方にお話を聞いた際、洗濯ネットを持って行った方が良いとのことだったので持っていきました。後日談ですが、物凄い音が洗濯機からしていたので洗濯ネットを使用するだけでもものすごく安心しました。

〈初めての海外〉

昔から海外に行くことに憧れを持っていましたが、海外は危ない所というイメージが強くありました。実際に行ってみると、気さくに話しかけてくれる人や手伝ってくれる人など優しい人が多かったです。デトロイトは楽しい街だなと思いました。壁にアートがあったりするなど、どこを見ても飽きませんでした。

〈新しい友達との出会い〉

この派遣を通して新しい友達との出会いが多くありました。まず派遣生のみんなです。違う高校の人と関わる機会はなかなか無く、自分と異なった環境にいる人と高校の話をするのは新鮮でした。次にホストファミリーです。自分と違う国に住んでいる子と話すことが初めてでした。言語の壁もありましたが、踊ったり歌ったり一緒に生活することで仲良くなれました。最後にホストシスターの友達です。ホストシスターの友達に会いに行く際、とても緊張しましたが優しく迎え入れ話しかけてくれたり、一緒にスモアを作って食べたり、Instagram を交換しました。一緒にゲームセンターにも行きました。

〈派遣中の食事〉

好き嫌いが多く私でもなんとかなりました。アメリカのメニュー表には中に入っているものが書かれていることが多く、抜きたいものを最初に No をつけて伝えたら抜いてくれるので、そんなに困ることはありませんでした。量は多いので物凄く食べられる子以外は半分ぐらい残しました。ただ、昼ご飯の時間や夜ご飯の時間が遅めなので胃が受け付けてくれない時がありました。他にも油っこいものを食べるが多いため胃薬を持っていった方が良いです。また、今まで水しか飲んでいないからといってセットのドリンクをSpriteにしたのですが、アメリカの M サイズは日本で言う L サイズです。炭酸はたまにしか飲まない私にはきつかったです。



〈ホストファミリーとの休日〉

土曜日は、お隣さん家で朝ごはんを食べてショッピングモールに行きました。お土産や自分のサンダルを買いました。

日曜日は、ホストファミリーの誕生日会の準備を朝からしました。風船を70個以上は膨らませアーチ状にしました。こんなに風船を膨らましたのは初めてです。その後、誕生日の子のドレスを買いに行きました。とても美しかったです。準備中お父さんは外でお肉を焼いていて美味しそうでした。行く前に誕生日のことは聞いていたのでシナモロールのTシャツを持って行きました。喜んでくれて良かったです。規模が大きく店を貸し切ってみんなで踊ったりして楽しかったです。



〈最後に〉

これほど楽しい派遣ができたのはたくさんの方々のサポートがあったからです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。この派遣を機にもっと英語や他の国の文化、日本の文化などを勉強したいと思いました。今後もこの経験を活かしデトロイトとの交流に積極的に参加して貢献していきたいです。今度またホストファミリーと会える日が来たらもっと英語が話せるように日々頑張ります。

人生一年間分の密度の二週間

佐野 翔太

アメリカ本土に行くのは人生で初めてのことでした。中学三年生の時から、ふとアメリカの大学に行きたいと思うようになり、それが自分の原動力となり今まで過ごしてきました。そして、待ち望んでいたアメリカに行くことが出来ました。自分の夢がグッと近づいた気がします。



学校の先生からこの話を聞いた時、頭に「ビビッ！」と電気が走り、「これだっ！」と思いました。これこそが僕が待ち望んでいたものだ！と思いました。それから即座に資料を完成させ何回も直しました。高校生になってから、自分の人生の価値というものが良く分からなくなっていました。「友達ができない！」とか「話しかけるのが難しい！」とか「成績が上がらない！」とかいろんな悩みを抱えていたので、人生が少し退屈でした。だから振り切って一発逆転狙って応募しました。面接の日、とても緊張していましたが、「ここで挫けちゃいけない！」と思い、勇気を振り絞って面接に挑みました。結果は合格でした。この知らせを聞いた時は心が踊りました。もしかしたら体も踊っていたかもしれません。アメリカに行ける、という事実がとてもうれしかったです。そして当日、ついにアメリカに向けて出発する日がやってきました。飛行機



が出発する瞬間、気持ちは最高潮でした。「遂に、念願のアメリカにいける！」こんな感じでした。今までの人生の中で一番ワクワクする瞬間でした。そしてアメリカに着いた時、みんなが英語を喋っていて、これから二週間頑張ろうと決意しました。

ホストファミリーはみんな優しくかったです。父のケンと一緒にサッカーを見てくれましたし、アイスクリームを買ってくれました。母のキムはジェンガで遊んでくれたり、サイクリングにも連れて行ってくれました。そして子供のジャクソンは僕にチキンを作ってくれたり、お出かけに行く時いつも付いて来てくれたりしました。派遣団の生徒の子達もみんなとっても優しく、毎日明日が楽しみでした。こんなに心から素直に楽しむ自分はそうそう無いのではないかと今振り返ってみて思います。さらに三宅さん、カールさん、ローズさん、その他沢山の優しい人に囲まれて本当に楽しい二週間を過ごしました。この二週間は瞬く間に過ぎて行きました。



Farewell Party が終わって楽器を教会に戻した後、ローズさんに自分の家まで送ってもらった日があります。その時、20 分くらい途切れることなく会話をすることが出来て、短い期間で成長を感じることが出来ました。僕が「アメリカの大学に行きたい！」と自分の夢を語った時、ローズさんは「じゃあ、またアメリカに戻ってくる時があったら連絡して！」と言ってくれました。自分の夢を応援してくれたことが嬉しかったです。ローズさんは毎日、欠かさず日記をつけているらしく、真似してみようと思います。

ホストファミリー、派遣団の方々、ローズさん、僕の家族、そして豊田市のこの企画に携わった全ての方々に感謝してもしきれません。何度も言ってしまうのですが、この二週間は本当に楽しかったです。人生の中で間違いなく一番大きなイベントで、これからの僕の一生の宝物です。

派遣を終えて

高木 花音

デトロイトでの 2 週間の派遣経験は、私の人生において非常に意義深いものでした。初めて外国に行く私にとって非常に楽しみなものでしたが、同時に緊張も感じました。実際にアメリカに着いて、日本とはまったく異なる街の雰囲気や驚かされました。街を歩いていると、建物のデザインや道路の配置、人々の服装や言葉遣いに、まるで異なる世界に迷い込んだかのような感覚が押し寄せました。しかし、その驚きと緊張はすぐに現地の方々との出会いで解消されました。

現地の方々はとてもフレンドリーで、私たちにも挨拶をしてくれたり、親切に案内してくれたりしました。デトロイトの方々のフレンドリーさがいつもわたしの心を明るく照らしてくれました。デトロイトの方々は、いつも笑顔で迎えてくれ、温かく歓迎してくださいました。彼らの親切さにとても感銘を受けました。

デトロイトの美術館と博物館への訪問は、私にとって考えを大きく変えるきっかけとなりました。そこで目にしたディープな歴史的展示物は、私の好奇心を刺激し、世界の歴史をもっと深く知りたいという欲求を引き起こしました。博物館の中で、差別や不平等に立ち向かう過去の出来事に触れ、その勇気ある人々の物語を学びました。一方、美術館では芸術を通じて異なる文化や時代の美しさと複雑さを感じました。これらの体験は、歴史が私たちの過去や未来にどれだけ影響を与えるかを理解し、さらに深く知るべきだと思いました。私はこれからも世界の歴史についての知識を広げ、異なる文化や人々に敬意を払いながら、より深い洞察を得ていきたいと思っています。

また、私はこの街が持つ音楽の豊かさに触れる機会を得ました。デトロイトは音楽の聖地として知られ、ジャズ、ブルース、モータウンなどさまざまな音楽ジャンルが花開いた場所であることを知りました。この街にいる間、私はその歴史と多彩な音楽シーンに触れ、新たな音楽への愛情を育みました。特に、ホストファミリーや現地の友人たちと一緒にダンスを楽しむ機会が一番の思い出として心に残りました。音楽と踊りを通じて、言葉以上に感情を伝えることができ、それは言葉の壁を越えた絆を深めるきっかけとなりました。

実の所、私は英語が得意ではないことから言葉の壁にぶつかる瞬間が数多くあり、何度も自分自身に対する悔しい思いを呼び起こしました。しかし、そんな厳しい状況でも、デトロイトの人々の温かさや寛容さが私を支えてくれました。特に、私のホストファミリーは、最初から最後まで私を受け入れ、沢山話しかけてくれました。彼らの言葉に包まれた温かさは、くじけそうな瞬間に何度も救いとなりました。ホストファミリーと過ごした時間は、まるであつという間の魔法のような時間でした。さよならパーティー前日、感謝の気持ちを表すために手紙を書こうとした時、言葉ではその素晴らしい経験を完全に表現することが難しいほどでした。日々の生活の中で、彼らは私を暖かく迎え入れ、家族の一員のように扱ってくれました。彼らの優しさや思いやり、文化の共有は、私の心に深い感銘を残しました。一緒に過ごした時間は、笑顔と幸せな思い出でいっぱい、それを言葉で表現することは難しいほど特別でした。ホストファミリーに感謝の気持ちを伝える手紙を書きながら、彼らにどれだけの影響を受け、どれだけ幸運な経験をしたかを思い出しました。この出会いは私の人生において貴重な宝物です。そして、これからも彼らとの繋がりを大切に、感謝の気持ちを忘れることはありません。

そして派遣団のみんな、今回のデトロイトへの旅は、私にとって特別なものとなりました。この素晴らしい経験を共有できた仲間に、心から感謝しています。この派遣中、多くの困難に立ち向かいましたが、それが絆を深める機会となりました。さよならパーティーではトラブルもありましたが、みんなで協力し、団結してその問題を解決することができました。それによって、最終的には大成功に終わることができてとても嬉しかったし本当に楽しかったです。この10人だったからこそ、この派



遣は最高のものとなりました。一緒に笑い、一緒に学び、一緒に成長できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。この旅での思い出は、私の人生の中で輝く宝物となりました。

感謝の気持ちをこめて、ありがとう。一生忘れない素晴らしい経験を共有できて幸せです。

デトロイトでの派遣を通じ、外国の文化に触れ、その違いを実際に体験することができました。異なる習慣や価値観、食文化に触れ、これらの違いから学ぶことは、自分自身の視野を広げる貴重な機会でした。



改めてこの2週間は、私にとって非常に貴重な経験でした。言葉の壁や文化の違いに立ち向かい、新しいコミュニケーションのやり方を学びました。そして異なるバックグラウンドを持つ

人々との交流を通じて、共感力を養う重要性も学びました。ここで新たな視点を得て、人生に多くの意味をもたらしたと思っています。この経験を胸に、国際的な視野を広げ、新たな挑戦に取り組んでいきたいと思っています。派遣先での出会いと経験に感謝の気持ちを抱きながら、未来に向かって歩んでいきます。

派遣を終えて

高村 和歩

僕は、小学生の頃から外国に行ってみたいと思っていました。そして、中学校の海外派遣に参加しようと思っていました。しかし、新型コロナウイルスの影響で海外派遣が中止になってしまいました。そして、高校へと進学してからは、海外に行くことを半ば諦めていました。そんな中で、教室掲示されていたポスターを見て、強い興味を持ち、申込みをしました。選考の日になり、本当に自分の英語力で大丈夫なのかと不安で胸が締め付けられる思いでした。選考を終えたときの僕の手応えとしては、あまりよくありませんでした。だからこそ、合格の報告が入ったときには、叫んでしまうほど嬉しかったです。念願の海外に行けることは僕にとって大きな一歩でした。しかも、車の聖地デトロイトに行くということに、車好きの僕は、特別な思いを抱いていました。それと同時に、自分の英語力で通用するのかという選考の時と同じ悩みを抱えていました。

デトロイトでまず感じたことは、人の温かさです。デトロイトに着いたのが深夜1時過ぎなのにも関わらず、市役所のローズさんは笑顔で迎えてくださいました。そんな、温かさに触れたことで、これまで感じていた不安が一気に吹き飛びました。ホストファミリーと初めて会ったときも、本当の家族のように僕の話に耳を傾けてくれました。一人で、日本から遠く離れたアメリカの地でやっていけるのか不安に思っていたのですが、デトロイトの皆さんが温かく迎え入れてくださったことで、僕は一人ではなく多くの人に支えられていることを実感しました。

〈忘れられない思い出〉

デトロイト2日目のことです。その日は、僕の誕生日でした。そんな僕に、ホストファミリーが大きなケーキを用意してくれました。僕は、初めて見るアメリカのケーキの大きさに驚きました。そして、その場にいる全員で誕生日の歌を歌ってくれました。忘れられない誕生日になりました。

もう一つ忘れられない思い出があります。それはフェアウェルパーティーです。これまでの感謝をデトロイトでお世話になった人たちに伝える会です。食事は何を振る舞えばいいのか、出し物はどうするかなど、日本にいる間から計画を練ってデトロイトに行きました。しかし、トラブルが続出しました。エレキギターを用意してもらった予定がアコースティックギターしか用意がないということもありました。パーティーが始まってからもフォークやスプーンを用意ができていなかったりゴミを捨てる場所がなかったりと問題点が多くありました。しかし、それもパーティーの醍醐味だと受け入れてくれました。しかも、バンドパフォーマンスでは急きょ曲を変更し、あまり練習ができていない中でのパフォーマンスでした。そんな僕たちのパフォーマンスが終わった後、大きな拍手と歓声をくれました。そのときの嬉しさが今でも心に残っています。

〈ホストファミリー〉

僕は、本当の家族と呼ぶことができるほど、良いホストファミリーに出会えました。この2週間共に過ごす中で、家に帰って来ると庭のトランポリンで遊び、ご飯を食べ、将棋やチェス、ゲームをするという一連の流れができていました。生活する中で、英語が伝わらないといった場面は多々ありました。しかし、ホストファミリーが僕の話に真剣に耳を傾けてくれるので、なんとかか会話をすることができました。そんな僕の拙い英語をホストファミリーは良いねと褒めてくれました。とても嬉しかったです。また、デトロイトを出発する前夜に、ドライブに連れて行ってとても楽しかったです。ありがとうございます。

〈食事〉

僕は、食が細いということもあり、アメリカの料理のサイズはとても大きく感じました。しかも、味の濃いものが多く、すぐに満腹になってしまいました。そのため、小さめのハンバーガーとコーラばかりの生活になってしまいました。量が多いと言うのは食べ物だけでなく、飲み物にも言えることでした。アメリカの店でコーラのMサイズを注文したところ、1リットル近く出てきて驚いたことを覚えています。また、様々な国のレストランが並んでいました。行ったところだけでも、メキシコ料理店、ギリシャ料理店など、日本ではなかなか見かけない国の料理店がたくさんありました。アメリカ国内で、世界中の料理が食べられるのではないかと勘違いするほどでした。

〈最後に〉

デトロイトに行ったことを通じて、様々なところで日本とアメリカの文化の違いを感じました。有形の文化はインターネットを使うことで、簡単に調べることができま

す。しかし、考え方や価値観といった言葉では表しきれない無形のものが多くありました。これは、日本にいただけでは感じられなかったと思います。このことから、文化を学ぶということは、その文化を持った人たちと同じ生活をして、直接感じることで感じました。また、相手と直接コミュニケーションをとるということも非常に重要だと思っています。今の時代は、優秀な翻訳ツールが多くあります。これまでの僕は、翻訳ツールを使っていたと思います。しかし、翻訳ツールを使うのと、直接話をするのでは、直接話をするこのほうが遥かに自分の言いたいことを伝えられるとこの派遣の中で感じました。そして、そのことは、今後も変わらないと思います。だからこそ、今の僕は、もっと英語を勉強し、不自由なく自分の言葉で、相手に伝えられるようになりたいです。

今回の派遣は、ホストファミリーやデトロイト市のローズさん、豊田市役所の皆さんや、派遣団のメンバーを中心に、多くの方々の支えによって行くことができました。本当にありがとうございました。

派遣を終えて

成田 一葉

〈アメリカでのホームステイを通して〉

私はホームステイでなければ得ることのできない経験を沢山することが出来ました。その例として最初に、日本で朝よく見かける通勤ラッシュがないことに驚きました。私はホストマザーに集合場所まで毎日車で送ってもらっていたのですが、その道は日本で言うバイパスのような道で、ホストマザーの猛スピードの速さの運転でも50分程度かかりアメリカの広大さを感じました。ちなみに、デトロイトで朝の通勤ラッシュによって発生する渋滞はこの二週間一度もなかったです。またその車の中では、毎日必ず最初に一人一人が、神様にありがとうと伝える時間があり、その後今日する事などをホストファミリーとお喋りをして集合場所へ向かっていました。日本にも神棚に向かってお祈りをするという感覚はありますが、毎日神様に感謝しお祈りをするという感覚はあまりないため衝撃的でした。私はキリスト教についてよく知らなかったため最初は戸惑いましたが、文化を学び体験する事が出来ました。

次に日曜日の教会でのお祈りです。ホストファミリーがシスターの仕事もしているということもあり、キリスト教が生活に根づいていることも体験する事が出来ました。まず Sunday school という授業で8時から「今みんなは何が必要なのか」という聖書に関する問いに答えていき、10時から教会の一番大きなホールで礼拝が始まりました。そこでは女の人がパワフルな声で歌を歌ったり、牧師さんが皆と聖書の1部を読んだりしていました。私のホストマザーは教会でシスターの仕事をしていたり、ホストシスターは教会のマイクのセッティングなどのお手伝いをしていたりしたため、キリスト教の日曜礼拝の裏側を見る貴重な体験が出来ました。

この2週間、ホストマザーは現地のスーパーに沢山連れて行ってくれました。行ったスーパーのブランドは違いましたが全



て日本のスーパーとは違い、スーパーには食材だけではなく、家電や薬、家具などが全て揃っており、駐車場も日本のように立体駐車場ではなく広く平面の駐車場でスーパーに行く事だけでも楽しかったです。また、スーパーでフルーツを買う際にまだ買っていないものを味見して買うということに驚きました。このような経験はホテルで2週間過ごしていたら出来なかったものばかりで、ホストファミリーのおかげで体験することが出来ました。

〈アメリカの歴史を知って〉

私はアメリカの歴史を授業で習う程度でしか理解していませんでした。私は日本と比べてアメリカは歴史が浅いので、アメリカの歴史は日本の歴史と比べて薄いものだろうと思っていました。しかし、アメリカの歴史はとても複雑で濃いという事を知ることが出来ました。アフリカン・アメリカンの博物館に行った時のことです。そこはアメリカにいるアフリカ系のアメリカ人がどのようにしてアメリカに来て、またどのように自由を得たのか示した博物館でした。そこには説明文と一緒に等身大の蝋人形でアフリカからどのようにして連れてこられたか船や監禁場所などの再現と一緒に展示されていました。これまで私が日本の教科書で学んできたアメリカとは視点が異なる為とても衝撃的でした。新しい自由な国を作るために連れてこられた人々が大勢いることを知り、悲しく、これまで感じた事のない感情でその博物館を回ったのを覚えています。もし私が旅行でデトロイトに行っていたのなら、デトロイトのダウンタウンなどだけを堪能してここには行かなかったと思います。しかしこの派遣のおかげでアメリカの歴史がどのように作られていったのか、またそれを知るためには多面的な方向から見る必要があると知ることが出来ました。

〈日本の文化を紹介して〉

私は書道が得意で Farewell party では必ず現地の方々に自分で書いている所を見せて紹介したいと思っていました。その願いが叶い、Farewell party で団扇に自分がいつも使っている習字道具を使って各ホストファミリーやこの派遣を通して知り合った方々に披露し、それをお土産として持ち帰って思い出にしてもらう事が出来ました。



漢字で「星」「絆」「友」「輝」「和」「愛」の中から1つ選んで貰ってそれを団扇に書き、朱肉を押すという簡単なものでしたが、ホストファミリーの中には漢字を読める方もいて、この意味知って読めるよと教えて下さったり、これはなんて読むの? と質問して下さったりして沢山の方々と日本の文化を通じて交流する事が出来てとても嬉しかったです。

〈2週間を終えて〉

まず初めに関わってくださった全ての方へありがとうと伝えたいです。三宅さん、カールさん、ローズさん、市役所の方、派遣団のみんなに支えられて2週間楽しく過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

私は日本との文化の違い、考え方の違いを実際に体験したく、この派遣に応募しま

した。そして私はこの2週間実際にデトロイト生活を体験してアメリカ人の気さくにいろいろな人と関わる姿勢や、好き嫌いがはっきりしてそれをしっかり伝えるところなど日本人とは異なる気質の持ち主が多いということ、また街は住宅街とお店がはっきりと区別されているということや信号機が道路の1レーンに1つついている所など日本にはないことを見られて、とても興味深く感じました。逆に、ホストファミリーの一日三食ハンバーガーなどといった食の違いは少し受け入れ辛い所もありました。

そして今回の派遣で覚悟はしていましたがやはり言語の壁もありました。自分のボキャブラリーの少なさで単語の意味の理解が出来ず、上手く意思疎通ができないこともありました。しかしこれもこの機会がなければ体験出来なかったことで、分からないなりに一生懸命伝えたいと強く思う事が出来ました。私はこの2週間を経験し将来国際的な仕事につきたいとさらに思うことが出来ました。そして教科書で学ぶことよりも深い知識を得ることが出来たことに加え、現地に行って体験することの大切さ、知らない事に対する好奇心を持つことの重要性を知ったことで、成長して帰国できたと思います。



派遣を終えて

日置 千咲乃

私は、ずっと昔からホームステイをしたいと考えていて、今回の事業を見つけた時、強く「行きたい!」と思いました。だから行けると決まった時、すごく嬉しくて、何度も頭の中でデトロイトに行きました。今回は、素敵な思い出を沢山語ろうと思います。

〈活気的な街、デトロイト〉

デトロイトは治安の心配をする必要はない、と前回派遣学生の方は言っていました。正直それでも不安でした。ネットでは治安が悪い、気をつけろ、などの沢山の忠告が書かれていました。ですが、これを読む次の派遣学生の皆さん、心配をする必要はありません。(本当に信じてほしい) デトロイトの街は都会で、活気にあふれていました。高層ビル群、大型船の通る大きな川、交通量、人口、全てにおいてキラキラしていました。私達派遣団がデトロイトに降り立ったのは深夜の1時頃でしたが、夜でもビル群は光が煌々としていて、都会だ!と感動しました。朝4時くらいに寝て7時に起き、朝のデトロイトを散歩すると人々が私達に「Good morning!」と挨拶してくれてとても嬉しかったです。海鳥が川の近くを飛んでいて、朝はとても清々しかったです。デトロイトって良い街だなと思えました。この2週間でデトロイトや周辺にある観光地を沢山周りましたが、特に印象に残っているのはコメリカパークで野球観戦したことです。私はめっぽう野球などのスポーツの試合は見ない方なのですが、実際に見るスポーツの試合、しかもメジャーリーグという大きな試合は非常に心揺さぶられるものがありました。観戦客も大きなスクリーンに映って、皆とても楽しそう。私も自然と笑顔になれました。ちなみにVIPルームがついていました。最高。デ

トロイトはとても素敵なお所なのだと、この派遣を通して何度も実感しました。

〈ホームステイ〉

この派遣の中で、ホームステイは思い出の大部分を占めているほど、大変であり、最高でした。2週間のホームステイは、様々なことがありました。ホストファミリーと対面する時、心音が耳の中でこだまし続けていました。名前を呼ばれた時、緊張はピークでした。しかしホストファザーが握手をしてくれて、歓迎してくれた！と少しほっとしたのも束の間、英語が話せなさ過ぎて会話が続かなく、気まずい食事となりました。少しだけ、日本のアニメやディズニー、音楽の話で盛り上がったものの沈黙はまた現れます。他の派遣団メンバーは楽しそうに会話していて、「陽キャのコミュニケーション力すご！」と内心思っていました。そのまま LEXUS 車の中でも沈黙は続き、家に帰ったら地下にある部屋に案内され、今日は遊ばずにお開きでした。正直まだ夜7時台の時間帯、寝るのにはあまりにも早かったです。私は地下室に隔離されたのか…と落ち込み、一人きり、英語を話せなかった自己嫌悪に陥りながら眠りにつきました。ちなみにこの日は自己嫌悪に相当参っていたのか大変病んでいました。次の日、派遣団の皆はホストファミリーと深夜まで起きていたらしく、ますます落ち込みました。私は、外国の人と話すのに向いていないのではないかと泣きそうになりました。次の派遣団の皆に言いたいことがあります。それは、Google 翻訳に好きなだけ頼れ、ということです。困ったら頼れ。マジで頼れ。私も頼りながら頑張りましたが、相変わらずお開きは早く、自分の部屋で長いこと天井を見続ける始末…。これの打開策に気づくのは随分後のこととなります。ホストファミリーと仲良くなれたのは土曜日あたりからです。土曜日にやっと日本から持ってきたお土産を渡すことができ、そこで仲も深まったし、特に「ゲーム」は世界を繋ぐと思いました。ゲームをすれば仲良し度 UP に繋がります。ジエンガでもいいです。恥を捨てて叫べば、楽しいのです。私はホラーゲームを三女の Alana とやって、怖くなったら二人で叫びました。本当に楽しかったです。昼には次女の Elissa のおすすめの映画を見ることができました。この土曜日で仲良し度は一気に UP したと思います。そして日曜日、長女の Olivia が Elissa と私を連れてショッピングモールに行きました。タピオカ店に連れてってくれたのでとても嬉しかったです。夜は、ポップコーンを食べながらホストファミリーと映画を見ました。猫の Alice が膝の上に乗ってきたので嬉しかったです。ここで初めて夜遅くまでホストファミリーと過ごすことができました。そこで私は夜遅くまでホストファミリーと過ごすことができる方法を思いつきました。「I am tired」及び「I am sleepy」というと無理をさせてはいけない、とホストファミリーは気を使って早くお開きにします。今まで私は、毎日「How are you?」と聞かれた時そう答えていたのです。「A little!!」などと言っても無駄なので、夜まで遊びたいのなら「I am fine」と言うべきです。私は月曜日から、元気アピールをしまくってホストマザーとゲームしたり、Elissa と夜遅くまで映画を見たりしました。寝るのは毎日1時以降になりましたが、勉強目的ではないので OK でした。こうしてホストファミリ

ーと順調に仲良くなっていきました。別れの時はハグをしました。本当にホストファミリーには感謝です。Elissa とは今でもたまに連絡を取り合っています。これからデトロイトに行く派遣団にメッセージです。ホストファミリーと仲良くなれなくて焦るかもしれませんが、大丈夫です。心配になったらリーダーに相談すればいいし、相性がどうしても合わなかったら最低限の関わりだけで私は良いと思っています。仲良くなりたいのだったらゲームをしましょう。ゲームは全てを解決します。



今回の派遣を通して、他にも伝えたいことがあります。それは、薬は沢山持って行った方が良いということです。派遣団生徒8人中、帰国後を含めると7人が微熱だったり調子を崩していたりしました。私だけ体調不良になりませんでした。私は小中高皆勤賞なので頑丈な方ですが、誰もがそういう人間ではないです。調子を崩していない人間が言うのもなんですが、風邪は怖いと思いました。



今回のデトロイト派遣は、私にとってとても良い一生の思い出となりました。アメリカは素晴らしい場所です。何かとビッグなので、アメリカに行ったら、心も広くなるのではないのでしょうか。

とにかく、この派遣に携わった皆様、有難うございました！！

とにかく濃かった2週間

藤田 結

始まったと思ったらいつの間にか終わっていたデトロイトでの2週間。飛行機に宿題を忘れて涙を流したあの日も、時差ボケで怠かったあの日も、熱を出して苦しかったあの日も、今となれば全部良い思い出です。

毎日が濃かった日々ですが、まずここに記しておきたいのは、私のファミリーがいかにアクティブであったか！！はじめて会ったディナーの時から最終日まで、彼らはもう、ずっとフルスロットルでした。派遣団での活動の後は、日が落ちるまで色々な場所に連れて行ってもらいました。日の入りが遅く、夜の8時ではまだ明るいくらいなので、たくさんの場所を回る時間がありました。寿司屋(経営者は中国の方だった。そしてあれは寿司じゃない、謎の辛い食べ物だった…)や、カナダとの間の川にある島、遊園地、本屋さん(日本の漫画やアニメのグッズがたくさんあって嬉しくなった！！ホストファミリーの親戚にも、アニメ好きがいたので色々語れました。最高の

文化交流でした)、Lauren (ホストシスター) の学校、デトロイトで一番大きい家、カジノ (外装を見ただけです) など…。どこに行っても新たな発見ばかりで、常にワクワクしていました。そして家に帰ってからは、家族みんなで一緒に過ごす時間。ボードゲームをして、おしゃべりをして、映画を観て、おしゃべりをして、アイスを食べ、おしゃべりをして…。3人は本当におしゃべりが好きで、毎晩たくさん、色々なことを話しました。しかし、その時間は、ただ楽しいだけではありませんでした。時々お父さんに、難しい話題を振られるのです。レポートの方にも書いた、夕食後6時間ずっとおしゃべりをしてきた夜は、難しい話のオンパレードでした。宗教の話に始まり、肌の色の違いについてまで、日本では授業でしか扱われないような重い話でした。派遣前の研修では、宗教と政治についての話はタブーだと聞いていたので、果たしてこれはどこまで踏み込んで良いのか、自分の意見を言うべきなのか、日本全体の世論を言うべきなのか…と、分からないことだらけだし、ファミリーが黒人さんだということもあり、そのあたりの言葉選びには細心の注意を払う必要がありました。ドギマギしながらも、自分の思うことをありのまま、拙い英語ではありますが必死に伝える私を、3人は真剣な表情で聞いていてくれました。そして最後には笑顔で、私たちもそう思うよ、その考えをずっと持ち続けてねとコメントしてくれたお父さん。今思えば、本当に良い経験でした。高校生のうちにこのような経験をさせてもらったことに、感謝しかありません。そんなこんなで毎日結局、朝の3時くらいまで起きていました。さらに朝は6時半起床…。毎朝アラームで起きられず、ホストマザーの力強いノックに起こしてもらっていました。そしてコストコのマフィンを持たせてもらい、車へダッシュ…。日本では考えられない生活を私はとても楽しんでいましたが、今思うとファミリーにとっては非常に迷惑な奴だったに違いありません。慌ただしい朝にしてしまったことを、今さらながら申し訳なく思います。

また、日中の派遣団での活動も、ワクワクの連続でした。中でも楽しかったのは、ナイアガラの滝です！！この日は派遣団のホストファミリーも一緒に行動することができました。アメリカとカナダは隣同士なので、ファミリーはみんなナイアガラに行ったことがあるのかなと思っていたら、Lauren は初めてだったそう。行きのバスでも、彼女の楽しみな気持ちが伝わってきました。そしてナイアガラに到着！期待を裏切らない迫力でした。そのスケールの大きさに、改めて、ここは日本じゃない…と思いました。そしてボートに乗って滝のすぐ下まで行った時には、ずぶ濡れになりながら、地球すごいなあと感嘆してしまいました。地球に生まれてよかった！ボートに乗ったあとはみんなで昼食を食べ、お土産を買って、帰路につきました。たくさんはしゃいで、写真も撮って、最高に楽しい1日でした。

最後に、派遣団メンバーについて。派遣前の研修の時から考えられないくらい、仲良くなれました。デトロイトに着いてからは、みんな、それぞれ何かしらの体調不良を抱えていたので、お互いに助け合いながら日々過ごしました。みんな優しくて最高の仲間です。この派遣事業での関わりが終わってしまっても、ずっと繋がっていたいと思います。そしてリーダーの三宅さん、サブリーダーのカールさんにも、たくさ

んたくさん、助けて頂きました。感謝しかありません！

たった2週間とは思えないほど濃かった、それでいて短かった、デトロイトでの日々。高2の夏ともなると、まわりには受験勉強モードに入りだす子も多い中でしたが、私はこの派遣に参加したことは、非常に意味のあるものだったと確信しています。勉強よりも大事なことをたくさん学ぶことができました。この経験が今後の人生にどれくらい影響するかはまだ分かりませんが、この派遣団に参加させていただいた以上は、この2週間の中で学んだこと、そしてそこから自分が考えたことを生かし、国際社会に貢献できるよう努力していきたいです。そして、デトロイトでのファミリーとの出会い、派遣団メンバーとの出会いを大切に、この縁を絶対に途切れさせないようにしたいと思っています。

世界への第一歩

山本 悠斗

〈日本のプロ野球と MLB の違い〉

日本のプロ野球は攻撃を行っているチームの応援団が、全力で声を出しトランペットの音色に合わせて応援しています。これが日本の野球の醍醐味と言っても過言ではありません。MLB もこのように応援歌があるのか、どのような雰囲気なのかずっと気になっていました。実際 MLB を見に行くスケジュールがあったので、肌で体験できることにとってもワクワクしていきました。



MLB では日本の様に応援団による応援というものがありませんでした。その代わりに、デトロイト・タイガースの投手が三振を奪った時に大音量の音楽を流して盛り上げていました。それに合わせてファン達が、手拍子や指笛をしながら叫んでいました。その他にも、回が終わるたびに様々なイベントがあり、とても盛り上がっていました。アメリカのアニメのキャラクターにそっくりな人を球場内から探すイベントでは、日本で見る事が出来ないの、とても面白いなと感じました。日本のプロ野球の応援とは全く違いましたが、MLBの方が盛大に盛り上げているなと感じました。なので、MLBは多くの人から愛されているのだと思いました。

〈この派遣で1番心に残ったこと〉

この派遣で様々な有名な観光地に行きました。その中でも特に心に残った観光地はアメリカンアフリカンミュージアムです。このミュージアムではアメリカの黒人の方々についての歴史を学べる施設です。黒人の方々過去の酷い仕打ちの動画やジオラマ、実際の道具、写真が展示してあり様々なことを深く考えさせられました。日本でもニュースで黒人



差別問題について特集になったりしています。僕はそれを見て、派遣中にも目の前で黒人差別に遭遇するかもしれないという恐怖を持って日本を出発しました。しかし、2週間1度も黒人差別に遭遇することはありませんでした。僕が肌で体験したのは、黒人の方も白人の方も一緒に会話したり踊ったりしている姿でした。日本で取り上げられたニュースはごく一部の人によるものだとすることを、それを見て知ることができました。このような体験から、皆が皆んな黒人の方々を差別している訳ではないということをこの派遣を通して学ぶことが出来ました。

〈第二の家族〉

初めてこの家族と出会ったとき、正直2週間うまくやっていたかとても不安でした。しかし、家族みんなが日本のことを質問してくれ、「おはようございます」「こんにちは」「いただきます」などの日本語の練習をしている姿を見て、持っていた不安は一瞬で消えました。ミスをしてしまった時でも、Sherriは毎回笑って「全然大丈夫だから！！気にしないで！」と慰めてくれました。時々、英語が聞き取れず、理解できない時がありました。すると、Isaiahが簡単な英語に訳してくれました。そのおかげで、無事答えることが出来ました。日が過ぎるにつれて家族との仲が段々と良くなっていき、気づいたら日常会話を自然とできるようになっていました。デトロイトで滞在した2週間をSmith Familyで過ごすことでとても充実した日々を送れました。ぎこちない英語を聞いてくれて、受け入れてくれて、本当に、本当に感謝でいっぱいです。



〈デトロイトの街並み〉

正直、デトロイトがこんなに都会だとは思っていませんでした。しかし、僕たちがデトロイト市で見た光景は、想像を絶するものでした。日本でもあまり見かけることのない路面電車、ガラス張りで近代的な高層ビルなどものすごく発展していました。今もなおデトロイトは再開発の真最中です。この活気あふれる街を沢山の方々に訪れてほしいです。

〈最後に〉

今回の派遣に携わった豊田市国際まちづくり推進課の方々、旅行会社さん、派遣費を支払ってくれた両親をはじめとする多くの方々にとても感謝しています。また、共に派遣へ行った三宅さん、カールさん、翔太、和歩、千咲乃、結、花音、一葉、鈴桜、この最高の9人に出会えてとても嬉しいです。人生初のアメリカ本土、ホームステイ、何もかもが新鮮で毎日ワクワクしながらベッドに行っていました。日本語が通じない世界で自分の言いたいことをホストファミリーに伝えることが出来るかとても不安でした。しかし、身振りをしてオーバーリアクションをすることや自分に自信を持って英語で話すことで伝えたいことを上手く伝えることができ、この2週間を毎日充実

して送ることができました。この貴重な経験を今後の自分の人生で生かせるようにしていきたいです。

英語での感想文

Reflections written by each student in English

Food**太田 鈴桜**

I've eaten a lot of different things since I came to America. Faygo's cotton candy flavor was the sweetest drink I've ever had. My favorite sweets were Lay's Classic, which I bought in a box and brought back to Japan. I ate a lot of different things for meals. I feel like I was able to eat almost everything I wanted: steak, sandwiches, ice cream, and hamburgers. My favorite was the Detroit Burger, which was more impressive than the burger I had imagined. It was the first time I had ever seen a hamburger with a knife stuck in it. Both the meat and patty were thick, chewy, and delicious.

The biggest event of my life**佐野 翔太**

In the summer vacation, we visited Detroit, America. It was the happiest two weeks of my life! I made a lot of memories and learned something important. One day, I told my host family that I'm quite shy, but they told me "Don't be shy! Because we are your family!". They were so kind and thoughtful. I think these two weeks have stronger meaning than my past one year.

My sincere thanks to all who gave me this wonderful experience! I'll do my best to help someone's life and be kind like them.

**Greatness of music****高木 花音**

During my time as an exchange student, I was often amazed by the many cultural differences between Japan and the United States. Among them, what left the strongest impression on me was how much people in Detroit love



music. In my host family's home, music was always playing, and whenever we traveled by car, we would sing along to our favorite songs. Additionally, when we went to parties and heard familiar or beloved songs, everyone would sing along, clap their hands, or start dancing. Being a music enthusiast myself, I was deeply drawn to the musical passion of the people in Detroit.

Warmth of the people**高村 和歩**

What I found in the Toyota Detroit Sister City Exchange Program was the warmth of the people.

In Detroit, I interacted with many people. Everyone welcomed me kindly, especially Ms. Rose who is in charge of Detroit, my host family, and Mayor Mike Duggan. I was not able to express my feelings well. But they listened to me and tried to understand the meaning of what I was saying. The warmth of the people of Detroit made my learning experience in the program even more fulfilling. All of this is thanks to everyone who supported me. Thank you so much for your support in various situations.

What I felt when I went to the Detroit Institute of Arts 成田 一葉

During my visit to DIA, I was fascinated by the cultural influence of the world. For example, when I saw the old plate that was made in Spain, I felt it had Asian and Egyptian influences. When I saw them, there was a difference between what I knew and what I saw, and my concept changed. This museum was originally a church, so I could feel the beauty of the building itself from the stained-glass windows and angel paintings on the ceiling. Also, I was able to see works that I had seen in art textbooks, such as Van Gogh's portraits and Georges Seurat's pointillist works. Their pictures filled me with joy and a soothing sense of contentment. It was a truly enriching experience.



Language barrier 日置 千咲乃

I cannot speak English very well, but I was interested in homestay. I thought that if I did a homestay, I would be able to speak English. I want to speak English. In fact, however, the first week didn't go well. I was keenly aware of the language barrier. Even so, I think we were able to get along because we tried to be actively involved. I thought that the important thing was not whether or not you could speak English well, but the attitude of trying to speak and smiling. When you smile, you can make those around you happy, so you can make them think that being together is fun. From now on, when I have the opportunity to speak in English, I want to speak actively without being shy.

My exciting days in Detroit 藤田 結

This 2 weeks in Detroit were definitely the most excited weeks in my life. Especially, the time with my host family is my treasure. My host family treated me as a member of real family. I was impressed by their loving behavior, and I was able to stay relax in their home. They took me many places and I

recognized how they love Detroit and how this city is great. And we talked a lot and shared our cultural differences. Then I learned there were many big differences between Japan and the US, and I enjoyed the differences. It was really valuable experience for me.

I really appreciate everything that the people in Detroit have done for our delegation. I hope this great relationship will continue forever.

英語での感想文

山本 悠斗

Through this program in Detroit, I was able to experience firsthand many different cultures in the United States. The weather in Detroit is very cool, with daytime highs in the 30°C. It was not scorching hot like in Japan, so it was very comfortable.

Also, the people in the U.S. were very cheerful and had a great sense of humor. For example, when I got on the train, an American person said to me, "Those shoes you are wearing are very fashionable!" I was very happy to be able to spend time with them. I was surprised because I had never had such a comment in Japan. Living in a world where Japanese is not spoken, I realized that in order to convey my intentions, I must speak anyway. I also realized that by expressing myself not only with words but also with my body, people can understand me even if they don't understand my words. I would like to use what I learned through this program in my future life.

And thanks to the city hall staff who organized this program, the travel agency, my parents who paid for this program, and many others. This was a very valuable experience. Thank you so much!



豊田市・デトロイト市姉妹都市交流資料

- 1 姉妹都市名 アメリカ合衆国ミシガン州デトロイト市
 2 提携年月日 昭和35年(1960年)9月21日
 3 提携目的 両市の友好親善と相互理解の増進ならびに市民の国際感覚を育み、世界に通用する人づくりを目指す。

4 学生交換事業

	回	年	学 生		リーダー	サブリーダー	計
			男	女			
受入	1	昭和40年(1965年)	1	3			4
	2	昭和43年(1968年)	2	2			4
	3	昭和47年(1972年)	2	2			4
	4	昭和49年(1974年)	1	3	1		5
	5	昭和52年(1977年)		4			4
	6	昭和53年(1978年)	2	3	1		6
	7	昭和55年(1980年)	2	4	1		7
	8	昭和57年(1982年)	3	1	1	1	6
	9	昭和59年(1984年)	1	3	1	2(市職員1)	7
	10	昭和61年(1986年)	3	3	1	1(市職員1)	8
	11	昭和63年(1988年)	2	2	1	2(市職員1)	7
	12	平成2年(1990年)	4	2	1	1(市職員1)	8
	13	平成4年(1992年)	3	5	1	1	10
	14	平成6年(1994年)	3	5	1	1(市職員1)	10
	15	平成8年(1996年)	4	4	1	1(引率2人ととも市職員)	10
	16	平成10年(1998年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	17	平成12年(2000年)	3	5	1	1(市職員1)	10
	18	平成14年(2002年)	3	5	1	1	10
	19	平成16年(2004年)	4	4	1	2(市職員1)	11
	20	平成19年(2007年)	5	3	1	2	11
	21	平成23年(2011年)	0	3	1	1(市職員1)	5
	22	平成25年(2013年)	2	6	1	1	10
	23	平成27年(2015年)	2	6	1	1	10
	24	平成29年(2017年)	2	4	1	1	8
	25	平成31年(2019年)	2	4	1	1(市職員1)	10
		計	60	92	21	22	195

派遣	1	昭和41年(1966年)	2	2	1		5
	2	昭和43年(1968年)	2	2	1		5
	3	昭和46年(1971年)	2	2	1		5
	4	昭和48年(1973年)	2	3	1		6
	5	昭和50年(1975年)	2	2	1		5
	6	昭和52年(1977年)	2	2	1	1(市職員1)	6
	7	昭和54年(1979年)	2	2	1	1(市職員1)	6
	8	昭和56年(1981年)	1	3	1	1(市職員1)	6
	9	昭和58年(1983年)	1	4	1	1(市職員1)	7
	10	昭和60年(1985年)	1	4	1	1(市職員1)	7
	11	昭和62年(1987年)	1	4	1	1(市職員1)	7
	12	平成元年(1989年)	2	4	1	1(市職員1)	8
	13	平成3年(1991年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	14	平成5年(1993年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	15	平成7年(1995年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	16	平成9年(1997年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	17	平成11年(1999年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	18	平成13年(2001年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	19	平成15年(2003年)	3	5	1	1(市職員1)	10
	20	平成18年(2006年)	3	5	1	1(市職員1)	10
	21	平成22年(2010年)	3	5	1	1(市職員1)	10
	22	平成24年(2012年)	1	7	1	1(市職員1)	10
	23	平成26年(2014年)	4	4	1	1(市職員1)	10
	24	平成28年(2016年)	2	6	1	1(市職員1)	10
	25	平成30年(2018年)	4	4	1	1(市職員1)	10
	-	令和2年(2020年)	新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止				
-	令和3年(2021年)	5	7	新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン交流を実施		12	
-	令和4年(2022年)	12		新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン交流を実施		12	
26	令和5年(2023年)	3	5	1	1(TIA職員)	10	
	計	190		26	21	237	

※オンライン交流は派遣として計上しています。

5 訪問団の交流

	年	内 容
デ市→豊田市	昭和 42 年 (1967 年)	キャバナー デトロイト市長来豊
豊田市→デ市	昭和 44 年 (1969 年)	佐藤保市長ほか 19 名訪デ
デ市→豊田市	昭和 46 年 (1971 年)	市制 20 周年・姉妹都市提携 10 周年を記念してデトロイト市長夫人ほか来豊
豊田市→デ市	昭和 51 年 (1976 年)	柴田助役ほか 11 名訪デ (国際姉妹都市会議出席)
豊田市→デ市	昭和 53 年 (1978 年)	西山孝市長ほか訪デ (国際姉妹都市会議出席)
デ市→豊田市	昭和 56 年 (1981 年)	市制 30 周年・姉妹都市提携 20 周年を記念しデ市親善使節団 (9 名) 来豊
豊田市→デ市	昭和 57 年 (1982 年)	山孝市長ほか訪デ
豊田市→デ市	昭和 58 年 (1983 年)	加藤助役ほか 2 名訪デ (国際姉妹都市会議出席)
デ市→豊田市	昭和 58 年 (1983 年)	コールマン・A・ヤング デトロイト市長来豊
豊田市→デ市	昭和 59 年 (1984 年)	豊田市議会北米視察団訪デ
豊田市→デ市	昭和 60 年 (1985 年)	姉妹都市提携 25 周年を記念して、西山孝市長及び豊田市議会北米視察団訪デ
豊田市→デ市	昭和 61 年 (1986 年)	豊田市議会北米視察団訪デ
豊田市→デ市	昭和 63 年 (1988 年)	加藤正一市長ほか 2 名訪デ
デ市→豊田市	平成 2 年 (1990 年)	市制 40 周年・姉妹都市提携 30 周年を記念しデ市親善使節団 (45 名) 来豊
豊田市→デ市	平成 5 年 (1993 年)	豊田市議会北米視察団訪デ
豊田市→デ市	平成 6 年 (1994 年)	加藤正一市長ほか 4 名訪デ (デトロイト美術館との友好交流宣言調印)
豊田市→デ市	平成 7 年 (1995 年)	デトロイト探検隊がインターシティフォーラムの事前調査、市長、総領事への講演依頼のための訪問
デ市→豊田市	平成 7 年 (1995 年)	豊田市美術館オープニング、デトロイト展のオープニング、第 5 回インターシティフォーラム「もうひとつのデトロイト」開催にあたり、デ市親善使節団 (35 名) 来豊
豊田市→デ市	平成 8 年 (1996 年)	豊田市女性国際交流海外派遣団 (10 名) 訪デ
豊田市→デ市	平成 10 年 (1998 年)	デトロイト市桜祭りへ参加のため鈴木助役及び豊田市ジュニアマーチングバンド (101 名) 訪デ

デ市→豊田市	平成 10 年 (1998 年)	デトロイト・シンフォニーオーケストラホールと豊田市コンサートホールが友好提携、デトロイトシンフォニーオーケストラが初来日、初公演。アーチャー市長夫妻ら約 150 人が来豊
豊田市→デ市	平成 19 年 (2007 年)	鈴木公平市長ほか 2 名訪デ(姉妹都市 50 周年記念事業の打合せ)
豊田市→デ市	平成 26 年 (2014 年)	太田稔彦市長ほか 4 名訪デ(姉妹都市 55 周年記念事業の打合せ)
デ市→豊田市	平成 27 年 (2016 年)	マイク・ダガン市長ら一行 (15 名) が姉妹都市 55 周年記念事業 業 へ参加のため来豊
豊田市→デ市	平成 27 年 (2016 年)	豊田市ジュニアオーケストラ親善使節団 (23 名) 訪デ

6 動物・植物・モノの交換

	年	内 容
デ市→豊田市	昭和 54 年 (1979 年)	豊田市長訪デの際 (1978 年)、デ市長より贈呈されたシベリア・タイガー「オマー」が豊田市到着
豊田市→デ市	昭和 57 年 (1982 年)	都市提携 20 周年記念として桜の苗木 1,000 本を贈呈
デ市→豊田市	昭和 58 年 (1983 年)	1982 年豊田市長訪デの際、デ市長よりミナミ・カナダツルーツがいが贈呈される
豊田市→デ市	昭和 59 年 (1984 年)	ニホンザル 10 頭をデ市に贈呈
豊田市→デ市	昭和 60 年 (1985 年)	都市提携 25 周年記念として石灯籠一基をデ市に贈呈
デ市→豊田市	昭和 60 年 (1985 年)	豊田市長訪デの際、デ市長より「ガゼルの像」が贈呈される
豊田市→デ市	平成 2 年 (1990 年)	都市提携 30 周年として、デ市に寄付金 1,000 万円と桜の苗木 100 本を贈呈
デ市→豊田市	平成 2 年 (1990 年)	デ市より「ドッジメモリアル噴水と塔門のモデル」が贈呈される
豊田市→デ市	平成 5 年 (1993 年)	豊田市議会北米視察団訪デの際、桜の苗木 50 本を贈呈

Golden Days Abroad in Detroit

～ 姉妹都市デトロイトを訪ねて ～ 2023

第26回デトロイト市派遣学生帰国報告書

●編集・発行 豊田市 国際まちづくり推進課

〒471-8501 豊田市西町 3-60 TEL : 0565-34-6963

e-mail : kokusai@city.toyota.aichi.jp